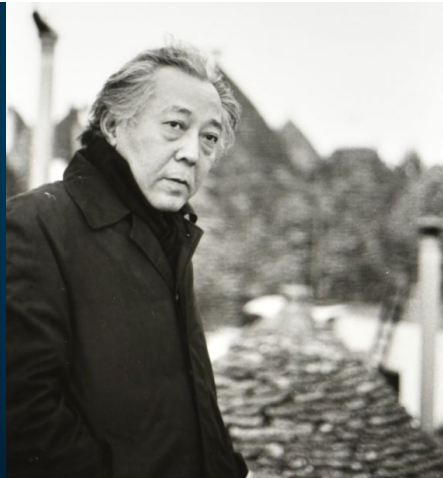


# 『我を人と成せし者は映画－加藤も丸山も映画大好き』



主催：立命館大学加藤周一現代思想研究センター、東京女子大学丸山眞男記念比較思想研究センター

協力：丸山彰氏(丸山眞男氏の御長男)

## 【開催概要】

本サイトは、立命館大学加藤周一現代思想研究センターと東京女子大学丸山眞男記念比較思想研究センター主催による企画展をウェブ上に再現したもので、下記目的の下に2018年に初めて開催し、今年度で3回目を迎えています。

このヴァーチャル展示を通じて、より多くの方々が戦後日本を代表する2人の知性－加藤周一と丸山眞男－のおりなした思想の世界に踏み込み、世界を、そして日本をどう理解すればよいのか、そしてこれからどう生きていけばよいのかについて、思索を深める契機となれば幸いです。

なお、本学には、複数のキャンパスがあると同時に、それぞれのキャンパスに図書館があり、それらを巡回するかたちで当企画展が実施され、当サイトでは、それらの実施状況をウェブ上に再現したものです。

## 【開催の目的】

- ①上記の両機関が所管するアーカイブや丸山眞男、加藤周一の両文庫が実施した整理・調査の中で明らかになってきたことを、共同研究の成果として広く一般に公開し、社会還元すること。
- ②20世紀の世界を代表する2人の知性は、たびたび共同研究や対話の機会を持ち、お互いの著作を読み、考え、書簡などで意見を交換しています。加藤周一文庫と丸山眞男文庫の2つの文庫の所蔵する原資料から、そうした2人の知性の交流を跡付けることができることを本展を通して紹介しています。

ヴァーチャル展示は、「[展示物一覧（このリンクをクリックください）](#)」へのリンクから御覧ください。

# <展示物一覧>

以下のリンクをクリックすると各トピックの詳細ページへジャンプします。

[ごあいさつ](#)

[丸山眞男文庫について](#)

[加藤周一文庫について](#)

[丸山眞男、加藤周一と戦前の映画体験](#)

## テーマ1.「西洋への窓」—加藤周一にとっての映画

[加藤の祖父・増田熊六](#)

[東京帝国大学医学部在学時の加藤、1940～43年【加藤周一文庫蔵】](#)

[『日比谷映画劇場ニュース』、『青春ノートⅧ』\(1941年5月～42年4月\)【加藤周一文庫蔵】](#)

[「映画評「ゴルゴダの丘」」『向陵時報』1936年12月16日付](#)

[加藤周一\(筆名・藤沢正\)「映画評「ゴルゴダの丘」」\(著作集・自選集未収録\)](#)

[※加藤が観た映画\(『ゴルゴダの丘』Golgotha、ジュリアン・デュヴィヴィエ監督、1935年\(日本公開1936年\)、フランス\)](#)

[「UN FILM RETROUVÉ」『青春ノートⅧ』、1941年12月17日\(その1～3\)【加藤周一文庫蔵】](#)

[※加藤が観た映画\(『舞踏会の手帖』Un carnet de bal、ジュリアン・デュヴィヴィエ監督、1937年\(日本公開1938年\)、フランス\)](#)

## テーマ2.人間と政治への関心の原点—丸山眞男にとっての映画

[丸山幹治\(中央\)と幼少期の鐵雄\(右\)・眞男\(左\)、1923年【丸山彰氏提供】](#)

[東京帝国大学法学部在学時と思われる丸山、1936年頃?【丸山彰氏提供】](#)

[※丸山が観た映画\(『カリガリ博士』Das Cabinet Dr. Caligari、ロベルト・ウィーネ監督、1920年\(日本公開1921年\)、ドイツ\)](#)

[「ディートリツヒを語る」『四平会会誌』創刊号、1931年【丸山眞男文庫蔵】](#)

[丸山眞男\(筆名・まさを\)「ディートリツヒを語る」\(全集未収録\)](#)

[丸山青年を魅了したマレーネ・ディートリヒ](#)

[「映画とわたくし」原稿\(別稿・自作年表含む\)、1979年【丸山眞男文庫蔵】](#)

## テーマ3.映画のなかの「現代」と「人間」—丸山、加藤の映画評論

[「現代における人間と政治」初稿断片、1961年【丸山眞男文庫蔵】](#)

[※丸山が観た映画\(『チャップリンの独裁者』The Great Dictator、チャールズ・チャップリン監督、1940年\(日本公開1960年\)、アメリカ\)](#)

[江藤文夫と加藤](#)

[加藤周一\(筆名・石\)「真面目な冗談 淀長流解説「愛のコリーダ」」『毎日新聞』1977年9月21日付夕刊](#)

[「夕陽妄語 映画と空間」](#)

[※加藤が観た映画\(『エレ二の旅』Τριλογία - Το Αιβάδι που Δακρύζει、テオ・アングロプロス監督、2004年\(日本公開2005年\)、ギリシャ・フランス・イタリア・ドイツ\)](#)

## その他

[丸山眞男、加藤周一映画年表](#)

[加藤周一映画関連著作](#)

[参考文献](#)

[主催・共催・協力](#)

## ごあいさつ

立命館大学加藤周一現代思想研究センターと東京女子大学丸山眞男記念比較思想研究センターは、2017年12月に研究提携協定を結びました。この研究提携協定に基づいて、これまで二回、両研究センターによる共同展示を企画し、両大学キャンパスで同時に公開してまいりました。両センターが保有する資料やアーカイブを利用した企画として立案し、研究成果よして学生や市民に公開し、社会還元することを目的としてきた活動であります。

その第1回は「君たちはこれからどう生きるか:丸山眞男と加藤周一から学ぶ」(2018年)、第二回は「〈おしゃべり〉からはじまる民主主義」(2019年)と題した共同展示を開催いたしました。

今年第三回は「我を人と成せし者は映画:加藤も丸山も映画大好き!」と題した展示を開催することといたしました。加藤や丸山は少年時代から映画に親しみ、映画とともに成長し、その後も映画に関心を寄せています。彼らの少年時代は、日本社会に映画が普及する時代に重なり、新しい表現方法として映画の人気の高かったこともあるでしょう。しかし、それだけではないと思います。映画は総合芸術であり、映画が描く世界にはあらゆるものが表現されることが与っているに違いありません。

風景や暮らしぶり、言葉やしぐさはいかに及ばず、映画には製作者の思想や時代精神までもが映し出されます。それゆえ、加藤は映画を「西洋の窓」(『羊の歌』)といい、丸山は「我を人と成せし者は映画」(「映画とわたくし」)と述べたのです。

本展示では、加藤と丸山が、どんな映画を観たのか、どんな感想を抱いていたのか、映画から何を学んだのかを読みとれるように構成しました。

加藤と丸山が学んだのは書物ばかりでなく、映画からも大いに学んでいます。この展示が映画の可能性について再考する機会となれば、企画者としてこのうえない喜びであります。

2020年10月

立命館大学加藤周一現代思想研究センター長

鷺巣 力

東京女子大学丸山眞男記念比較思想研究センター長

和田博文

「展示物一覧」へ戻る (🔗)



## 丸山眞男文庫について

丸山眞男文庫は、東京女子大学の図書館内にあります。20世紀を代表する知識人の一人、丸山眞男(まるやま・まさお、1914～1996)が遺した蔵書や様々の草稿などを所蔵しています。これは、1998年9月に、丸山家から東京女子大学に寄贈されたものです(2011年には、丸山の著作の一切の著作権も遺贈されました)。

所蔵資料の内容は、約18,000冊の図書(その内、約5,800冊には、丸山自身による書き込みがあります)、約6,200件の草稿類、約18,000冊の雑誌、そして丸山に宛てられた書簡類(段ボール26箱分)などです。さらに、丸山が深くかかわった「平和問題談話会」関係資料(吉野源三郎の整理による)も、岩波書店から寄贈され、丸山文庫の所蔵となっています。まさに、丸山の学問と思想の全体像を知ることができる網羅的な構成です。

丸山眞男文庫は、所蔵資料の調査・整理を続け、まず2005年に、書き込みなどの無い図書を、開架図書として東京女子大学図書館内で公開しました。ついで、草稿類(2009年)、閉架図書(2010年)、雑誌(2012年)、楽譜類(2014～2015年)を、順次公開してきました。

この内、図書は、インターネット上に表現した「丸山眞男文庫バーチャル書庫」(2015年公開)によって、丸山宅での配架の様子を閲覧できるようになりました。閲覧すると、まるで、東京女子大学のすぐ近所にあった丸山の書斎にもぐりこんで、本棚を眺めているような気分になります。また、草稿類は、「丸山眞男文庫草稿類デジタルアーカイブ」(2015年公開)によって、文庫を訪れなくとも、インターネット上で閲覧できるようになりました。

丸山に宛てられた膨大な数の書簡などについては、現在、なお調査中です。

本文庫がさらに多くの方に利用され、丸山眞男の学問と思想を今後活かしていくことに貢献できるよう、今後も努力してまいります。

丸山眞男文庫顧問 渡辺 浩(東京大学名誉教授・日本学士院会員)



丸山眞男、1959年、『丸山眞男集』第8巻  
(岩波書店)より

「展示物一覧」へ戻る (↩)

## 加藤周一文庫について

加藤周一文庫は、2010年に加藤の御遺族から寄贈された書籍・雑誌類と手稿ノート・資料類とを所蔵しています。立命館関係者だけではなく、一定の手続きをしていただければ、広く市民も閲覧することができます。

〔書籍・雑誌類〕蔵書数は約20,000点に上ります。そのうち約12,000点は開架式閲覧室にて、自由に閲覧、その一部は貸出を受けることもできます。約8,000点は閉架式書庫にて収蔵、一定の条件がありますが、請求によって閲覧が可能です(貸出不可)。開架式の蔵書は3つのグループに分けられます。①加藤の著書と加藤の著作が載る書籍・雑誌。②加藤について書かれた書籍・雑誌。③加藤が所蔵し利用した参考書籍・雑誌類。①②については、完全に揃っていることが望ましく、現在も補充作業を続けております。

〔手稿ノート・資料類〕「手稿ノート」、来信、写真、手帳、新聞切り抜き、地図などの資料類を収めています。「手稿ノート」の総頁数は10,000頁を超え、大半は加藤自身によって主題別にファイリングされ、一部は加藤周一研究センターのスタッフがファイリングしました(ファイル数は1,000超。両者は区別されています)。これらの「手稿ノート」は主として執筆のために取られ、加藤の著作や思想を精しく研究するためには、欠かすことができない重要な資料です。その他の資料類はまだ整理が終わっていません。

〔デジタルアーカイブ〕「手稿ノート」は、管理保存上、現物をお見せすることができません。そこで「手稿ノート」のデジタルアーカイブ化を進め、インターネット上で公開しています。このアーカイブは「キーワード」検索の機能をもっています。すでに公開されたノートは『青春ノート』、2冊の《Journal Intime》(1948～51年の日記)、日本文学史関連のノート、『Notes on Arts』、『1968 1969』、『詩作ノート』など22冊に上り、今後も公開を続けて参ります。

加藤周一の研究と精神とを引き継ぐために、加藤周一文庫が少しでも資するよう、一層の努力を傾けて参ります。

立命館大学図書館長 重森 臣広(立命館大学教授)



加藤周一、1979年、加藤周一文庫蔵

「展示物一覧」へ戻る (🔍)

## 丸山眞男、加藤周一と戦前の映画体験

丸山眞男(1914～96年)と加藤周一(1919～2008年)は、共に多くの映画に関わる文章や座談を發表しており、映画に対する強い愛着の念を終生、抱き続けた。なぜ、彼らはこれほどまでに映画を愛したのだろうか。その背景には、彼らの青年期に当たる戦前の映画受容の変遷が深く関わっている。

映画(活動写真)は、1890年代後半に西欧から最新技術として日本に輸入された。以後日本では、無声を補うため映画の内容を説明する活動弁士が登場するなど、独自の発展を歩み始める。また、無声時代に映画館で伴奏を担当した楽団は、軍隊の楽隊と共に、日本における西洋音楽の受容にも重要な役割を果たした。輸入後まもなく日本国内でも映画制作が始まり、1918～23年頃に起こった「純映画劇運動」を契機にして、日本映画は、それまでの活劇を中心とする、伝統演劇の強い影響下にあった「活動写真」を脱し、映像表現の独自性を自覚する「映画」へと自立していく。この頃から次第に「活動写真」にかわり、「映画」という名称が一般化していく。

第一次世界大戦が終結するとアメリカ映画の公開も盛んとなり、1920年代になると、ドイツ表現主義の作品やフランスの前衛映画などヨーロッパ映画の輸入が本格化する。「無声」から「トーキー」への移行期に当たる1930年代には、国内外の優れた作品が数多く生み出される映画の黄金時代を迎え、映画館の入場者数は、1936年の2億5000万人から41年には4億6000万人に達し、戦前最大の伸びを示した。また、当時の大学生の娯楽の筆頭には映画が挙げられた。一方で、1936年頃から検閲も厳しさを増し、遂に1939年の映画法の制定によって、映画産業は国家の統制下に置かれ、海外の映画の上映も制限されるようになった。

このように「活動写真」から「映画」へ、「無声」から「トーキー」へと発展した映画の歩みと歩調を合せるように成長したのが、1910年代に生まれた丸山や加藤たちの世代だった。都市中産階級のモダニズム文化の空気をいっぱい吸って育った彼らは、特に西欧からもたらされた映画から、自由や民主主義といった価値の普遍性、また複雑な陰影を持つ人間の多面性を感じ取った。丸山が「いや影響なんていうのもおかしいくらいぼくは無限の示唆をフィルムの世界から受けたね」(埴谷雄高との対談「文学と学問」)と語っているように、戦前の映画体験は、丸山と加藤の精神史に深く刻み込まれているのである。



丸山眞男と加藤周一、加藤周一文庫蔵

## テーマ1:「西洋への窓」——加藤周一にとっての映画



## 加藤の祖父・増田熊六

加藤に映画鑑賞の習慣を教えたのは、母方の祖父・増田熊六（1866～1939年）だった。元陸軍の騎兵将校で、イタリア留学の経験を持つ熊六は、小学生の加藤や従兄弟たちをよく映画館に連れて行った。熊六の好む映画は、邦画ではなくもっぱら「西洋もの」で、このような祖父の姿を加藤は「活動写真に異国の風俗の影をもとめ、昔若かったときにそこで味わった快樂を思い出していたのであろう」（『羊の歌』）と推測している。その影響によって加藤も東和商事合資会社輸入のヨーロッパ映画を熱心に観るようになり、『会議は踊る』（1931年）や『未完成交響楽』（1933年）といった作品から、「私は古都の石畳の上に鳴る馬車の音を聞いたし、中部欧州の広大な麦畑の上に青い空と太陽を感じた」（同前）という。加藤にとって、初めて「西洋」を鮮やかに感じさせてくれたのが映画であり、まさにそれは「西洋への窓」を意味した。加藤が本格的に映画を観るようになったのは、第一高等学校に進学してからである。映画演劇研究会に所属し、当時公開された映画のほとんどを妹の本村久子氏と連れ立って観に行っていたようだ。その後も加藤は生涯にわたって映画を愛し、晩年まで映画に関わる評論を数多く執筆することになる。



増田熊六肖像写真、加藤周一文庫蔵

「展示物一覧」へ戻る (↶)



## 東京帝国大学医学部在学時の加藤、1940～43年、加藤周一文庫蔵



「展示物一覧」へ戻る ( [㊤](#) )

『日比谷映画劇場ニュース』『青春ノートⅧ』、1941年5月～42年4月、加藤周一文庫蔵

加藤が東京帝国大学医学部在学時に綴っていた『青春ノート』に挟み込まれていた、日比谷映画劇場のパンフレットである(138号、1938年10月5日発行)。東宝が直営する日比谷映画劇場で上映予定の映画のラインナップが掲載されており、『暗黒街の弾痕』(フリッツ・ラング監督、1937年)、『夢みる唇』(パウル・ツインナー監督、1932年)、『冬の宿』(豊田四郎監督、1938年)が紹介されている。青年時代の加藤が熱心に映画館に通っていたことをうかがわせる。

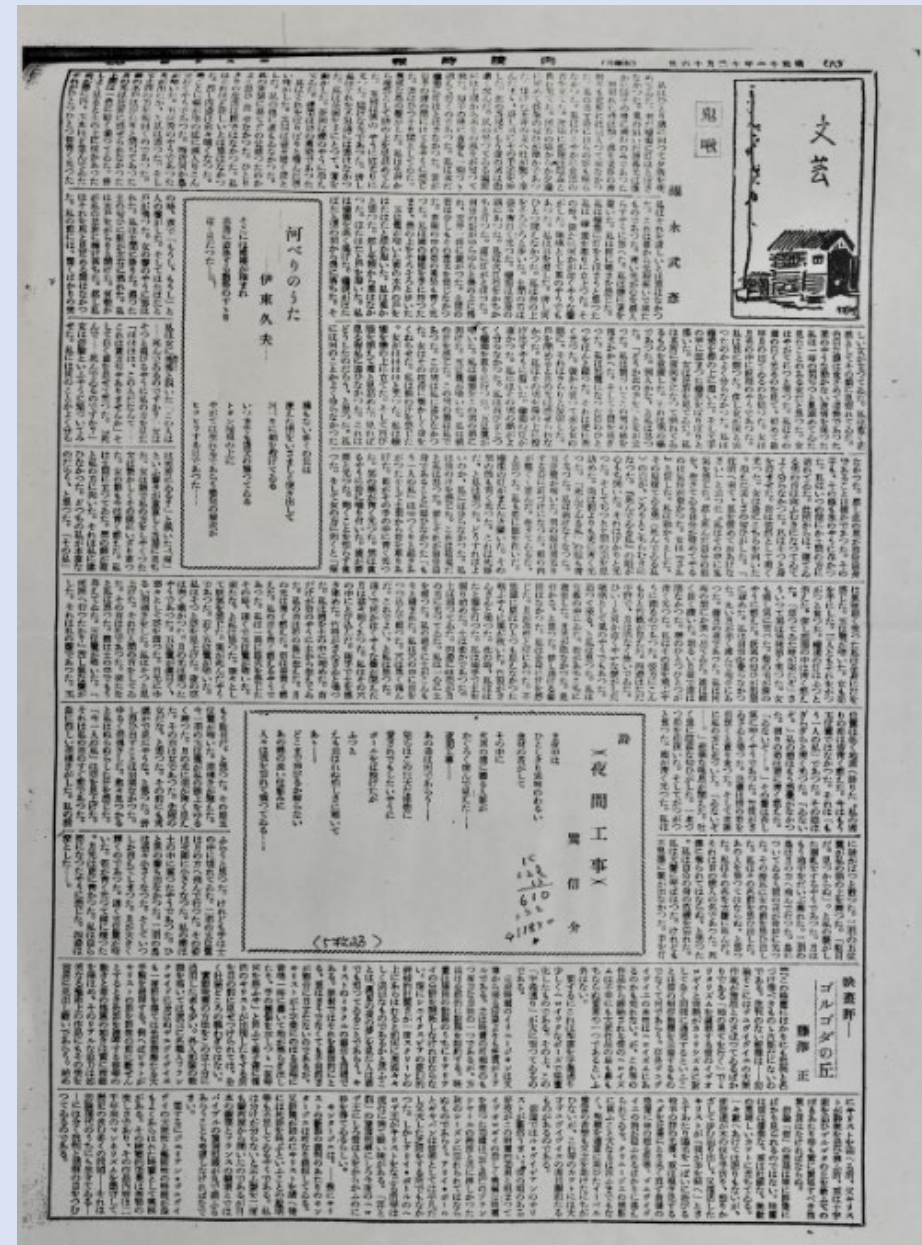
[illegible]

「展示物一覧」へ戻る (  )



## 「映画評「ゴルゴダの丘」」『向陵時報』1936年12月16日付

第一高等学校在学中の加藤が17歳の時に、「藤澤正」の筆名で寄宿寮の学生新聞に寄せた映画評論。現在確認されている加藤が発表した初めての文章である。加藤は、他作品との比較を交えながら、カット割りやモンタージュの効果といった映像批評を展開し、そして「デュヴィヴィエの大衆性と芸術性の特徴が最もよくあらはれた映画」と結論付ける。キリストの受難劇という「二千年来のマンネリズム」を、芸術家としてのデュヴィヴィエは、天才的技術に基づく絵画的映像によって、「ヘロイツク」に描き出すことに成功している。一方で、彼の大衆作家的側面によって、映画の中身は「歴史の含む多くの問題——それは勿論現代のうちにも生きてある——には全く批判と洞察の目をつむつて」しまっている。ここからは、映画にも「歴史」や「現代」に対する批評性を求める加藤の態度が読み取れる。またデュヴィヴィエ(1896～1967年)を、映像表現における美的描写の卓抜さと、主題における批評性・イデオロギー性の欠如との共存と捉える視点は、戦後に加藤が論じた芸術と政治の二重性という知識人論にも通底しているよう。



「展示物一覧」へ戻る (🔍)

## 加藤周一(筆名・藤澤正)「映画評「ゴルゴダの丘」」(著作集・自選集未収録)

この映画にはかりにも批判と名づけ得べきものゝ片影だにないのである。批判のない解釈は——勿論そこにはデュヴィヴィエの大衆作家が傲然とのさばつてゐるばかりである「地の果てを行く」でミタリズムを謳歌する彼のイデオロギイと情熱がカトリシズムに対して全く同様に通用するといふことは彼の制作動機を示唆するものでなくて何であらう。存外デュヴィヴィエの本性はヘロイズムにあるのかも知れない。が、これ等の作品から帰納される彼のヘロイズムは不幸にも大衆作品の最も鼻もちならぬ要素の一つであるといふ外はない。

要するにこれは聖書の字義通り少しくヘロイツクなポーズで映画化したものである。その上、この「字義通り」が大に崇つてゐるのである。元来映画のイリュージョンは文章から来る印象よりも性質がリアルである。之は映画の可能性のもつ有力な方法の一つであるが、方法は必然的に対象を制約する。映画は独自の対象のうちにリアリテイの分野を開拓しなければならない。現にシェイクスピアの夢幻的神秘的壮麗さが一度スクリーンの上にあはれると如何に馬鹿々々しく退屈なものであるかと言ふことは「真夏の夜の夢」を見た人は誰でも知つてゐることであらう。キリストのミラクルの場合も同様である。聖書ではそれを象徴的にとる、或はさうでなくても不自然さが割合に目立たないのであるが、キリストが十字架にのぼる途端に雷鳴一時に轟いて地が揺らぎ出したり、手の槍傷を示しつつ「汝等何を惑ふや」と言ふて弟子達に復活のキリストが出現したりする所を目の前に見せつけられては、全く荘厳どころの騒ぎではない。

実際映画の方法をこの位十分に活用した者も少い。外人部隊の戦闘を描いては流石に名職人フランクロイドに及ばぬデュヴィヴィエも一度所を得ては光彩陸離たる大手腕を発揮する。例へばピラトがキリストの罪を群衆の前に断ぜんとするとき死罪を連呼する彼等の動きと音の描写の如きは実に精緻を極め、そのリアルな迫力は如何なる藝術上の作品にもその美を容易に見出し難いであらう。始めにキリストを迎へる所、又キリストが群衆を追ひ払ふ所、或は十字架を負ひゴルゴダの丘を蔽ふてのぼるあたり等も実に驚嘆すべき描写と言はなければならぬ。

勿論「彼」の表現は単に群衆にばかり見られるのではない。映画は或は優美な、或は荘厳な、無数の素晴らしいカットに充ちてゐる。一々数へあげては限りもないが、使徒達が木の枝を手折り、振りかざして歩む辿り出し、又復活したキリストが「我が羊を飼へ」とさとすあたり陽光を一ぱいに浴びる牧羊の群の光景、或は覗き見するユダを近景にとり遠く写す最後の晚餐に林の廻る所等、デュヴィヴィエの詩が溢ふれるばかりに湛えられてゐる。クリュージェの撮影に負ふこと大なるは言ふまでもなく、聖歌を適当に用ひたイーベル担当の音楽も又之を助けたにちがひないが、これ等のカットには天才デュヴィヴィエの面目躍如たるものがあるのである。

俳優ではル・ヴィギアンが断然うまい。彼の幅のある好技がこの絵画的効果と相まつてイデオロギイの恐しく貧弱な映画を救つた功績は「罪と罰」のブランシヤールの熟技と共に淋しかつた秋のシーズンに忘れられてはならぬものであらう。アリエ・ボールとギヤバンは彼等としては平凡だし又大した芝居をする所でもなかつた。しかしアリエ・ボールのヘロデ王がキリストをなぶる所等は流石に捨て難い味がある。「罪と罰」の予審判事にしろ今度のヘロデ王にしろ彼は人をからかふのに妙を得てゐるらしい。

モンタージュは、——殊にキリストの断罪の裁判のあたりのモンタージュは可なり錯綜してゐる。又群衆が始めにキリストを讃へ後には死罪を叫ぶといふことの説明等も不足してゐるやうである。私は分けが分らないと云ふ声を二度も観客席から聞いたのであるが日本の観集とフランスの観集とではバイブルの予備知識が丸で違ふのであらうことも考慮しなければなるまい。

要するにジェリアン・デュヴィヴィエの大衆性と藝術性の特徴が最もよくあらはれた映画として興味がある。その絵画的効果は無類の美しさであり、その作品内容は二千年来のマンネリズムを墨守して歴史の含む多くの問題——それは勿論現代のうちにも生きてゐる——には全く批判と洞察の目をつむつてゐるのである。

(明らかな誤植は訂正し、旧字体は新字体に改めた)



## ※加藤が観た映画

『ゴルゴダの丘』Golgotha、ジュリアン・デュヴィヴィエ監督、1935年（日本公開1936年）、フランス

当時、日本におけるデュヴィヴィエ監督の人気は高く、加藤も「デュヴィヴィエの映画は輸入されたものを全部観ちゃったんじゃないかな」（『過客問答』）と語る。『青春ノート』にはデュヴィヴィエの作品名が頻繁に記され、例えば『にんじん』（1932年）は、映画に触発された小説の構想や映画評論が書かれている。

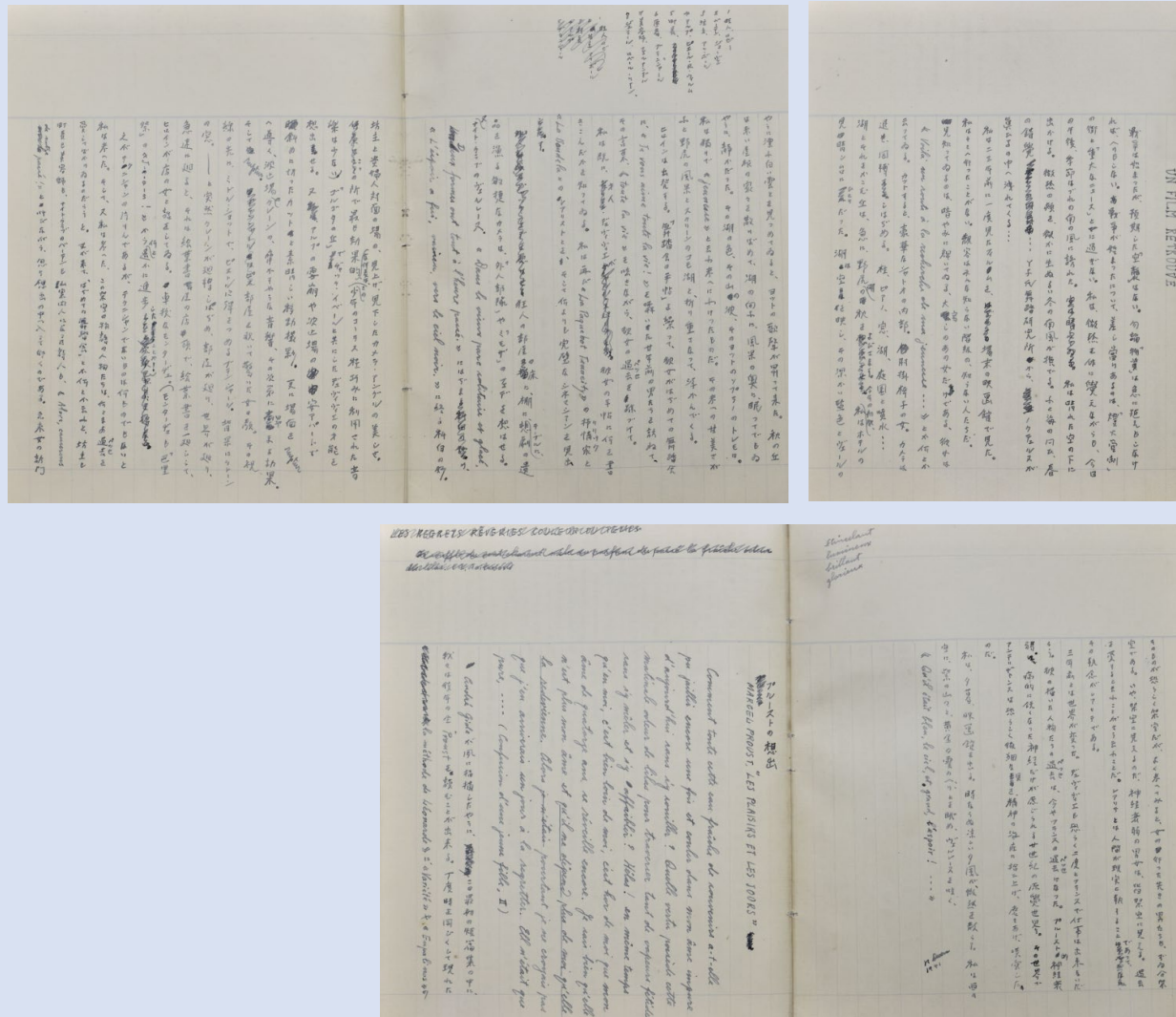
『ゴルゴダの丘』はキリストのイエルサレム入城からゴルゴダの丘での磔刑・復活までを聖書に忠実に描く。マタイ伝に代表されるキリストの受難は、映画草創期のグリフィス監督による『イントレランス』（1916年）をはじめ、現代に至るまでくりかえし描かれるテーマである。デュヴィヴィエ自身は「これは単なるキリスト一代記ではなく、当時のユダヤ人とローマ人との間のキリストを巡っての政治ドラマを描こうとしたものである」と語ったという。はじめは歓呼してキリストを迎えた民衆であったが、権力の座から追われることを恐れた司祭たちの画策によって扇動され、遂にはピラトに何度問われてもキリストの死刑を要求する。この民衆の暴力性は現代の私たちにも通ずるだろう。ピラトはジャン・ギャバン、ヘロデ王は『にんじん』などに出演するアリ・ボール、音楽はジャック・イベール。



映画「ドン・カミロ」撮影中のジュリアン・デュヴィヴィエ(右)

# 「UN FILM RETROUVÉ」『青春ノートⅧ』、1941年12月17日、加藤周一文庫蔵

1937年から1942年にかけて書かれた『青春ノート』(全8冊)には、映画の話題が数多く登場する。中でも『舞踏会の手帖』は、加藤にとって感慨深い映画であったことがうかがえる。加藤は『舞踏会の手帖』を少なくとも二度観ており、一度目は1938年頃、二度目は1941年12月である。二度目の感想を記した「UN FILM RETROUVÉ」で加藤は、デュヴィヴィエのカメラワークの巧みさを賞賛すると共に、20年もの歳月の間に変わり果ててしまった「過去(パッセ)を愛してばかりいる」人々の物語だと評している。文末には「三年前とは世界は変った。デュヴィヴィエも恐らく二度とフランスでは仕事は出来ないだろう。彼の描いた人物たちの過去(パッセ)は、今やフランスの過去(パッセ)になった」とあり、このように綴る加藤の脳裏には、1940年6月のナチス・ドイツによるパリ陥落、また1941年12月8日の日米開戦があっただろう。『舞踏会の手帖』を通じて若き加藤は、1938年と1941年の間に世界が一変したこと、そして、自由や民主主義が、もはや「過去」のものとなってしまったことを覚り、深い悲しみと危機意識を抱いた。



「展示物一覧」へ戻る (↶)

## ※加藤が観た映画

『舞踏会の手帖』Un carnet de bal、ジュリアン・デュヴィヴィエ監督、1937年（日本公開1938年）、フランス

夫の死をきっかけに、若い裕福な未亡人クリスティーヌ（マリー・ベル）は最初の舞踏会で踊った相手を、手帖を頼りに順に訪ねていく。彼女は若くして結婚し夫との生活だけで20年を過ごした。再出発の手がかりとして、最初の舞踏会で彼女に愛を語った人々を探し、失われた過去を求めて旅に出る。だが20年ぶりに再会するかつての青年たちの多くは過去の面影をとどめていない。すでに自死した者、犯罪に手を染めた者、精神を病んだ者など、悲劇的な運命を辿った人物も少なくなかった。名優ルイ・ジュヴェ演ずる犯罪組織の黒幕であるキャバレー店主もそのひとりである。ヴェルレーヌの詩「感傷的な対話」を、警官の迫るキャバレーの片隅でふたり諍んじる場面は、加藤も『青春ノート』に触れ「科白の妙」と評する。主人公が訪問する人々の挿話は独立して描かれており、本格的なオムニバス形式としては最初期の作品である。各挿話に主人公が配される形式で、「こういう絢爛たる配役はフランスの映画史上にも空前のものであるといつてよい」と日本公開当時、津村秀夫は評した。物語の最後にクリスティーヌの養子に迎えられるジャックは『にんじん』の子役で知られるロベール・リナン。

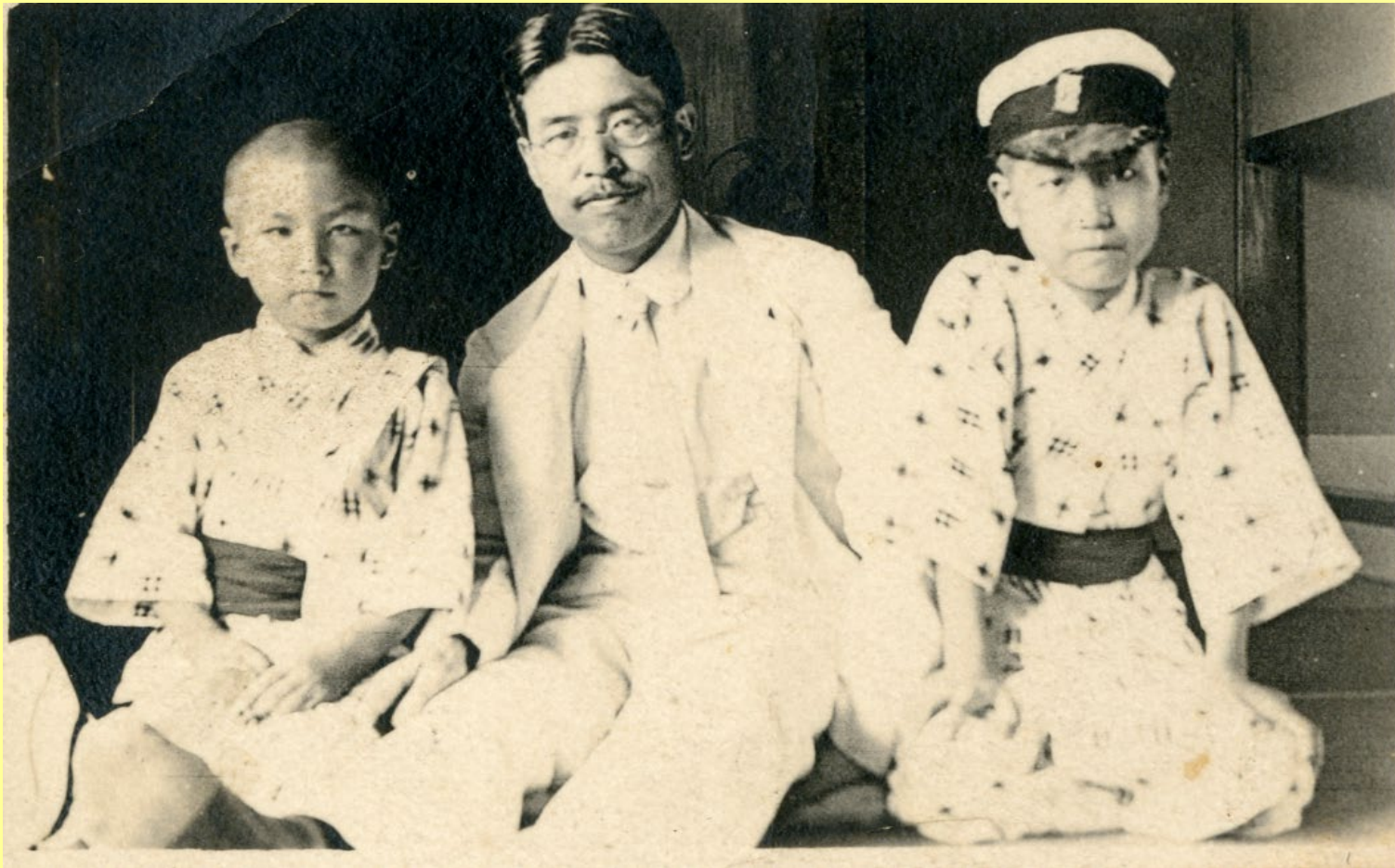
「展示物一覧」へ戻る (  )



## テーマ2: 人間と政治への関心の原点——丸山眞男にとっての映画

## 丸山幹治(中央)と幼少期の鐵雄(右)・眞男(左)、1923年、丸山彰氏提供

丸山が映画の虜となるきっかけを作ったのは、東京日日新聞記者の父・丸山幹治(1880～1955年)だった。四谷第一尋常小学校に通っていた1921～23年頃、幹治に連れられて浅草で観た尼港事件を伝えるニュース映画が、幼い丸山の心に強い印象を残した。また、映画ファンだった4歳年上の兄・丸山鐵雄(1910～88年。後にNHKのプロデューサーとなり、「のど自慢」など歌謡番組を手掛ける)の影響もあった。父や兄に感化を受けた小学生の頃の丸山は、四谷館などで「連続大活劇」やチャンバラ映画に夢中になり、東京府立第一中学校に上がると、芝園館や武蔵野館などに通い、欧米の芸術性の高い映画にも親しむようになった。戦前、中学生が映画館に出入りすることは芳しいこととされなかったが、「ちょっとばかり不良ぶる善良生」の丸山は、頻繁に午後の授業を抜け出し映画を観に行った。丸山は、成長と共に邦画・洋画を問わず様々なジャンルの映画に触れた。後年自身の映画体験を「映画が私の幼い魂のひだに分け入った多様さは、ほとんど自分でも意識化するのに困難を覚えるほどである」(「映画とわたくし」と回想している。



東京帝国大学法学部在学時と思われる丸山、1936年頃か、丸山彰氏提供



「展示物一覧」へ戻る (  )



## ※丸山眞男が観た映画

『カリガリ博士』Das Cabinet des Dr. Caligari、ロベルト・ウィーネ監督、1920年(日本公開1921年)、ドイツ

本作は第一次世界大戦後のドイツで生まれた「表現主義」を代表する映画として知られており、傾いた建物や誇張された陰翳といった特徴をもつ美術セットによって不安や恐怖を視覚的に表現した点に特徴がある。物語は登場人物のひとりであるフランシス青年(フリードリヒ・フェーエル)の回想として、ヴェルナー・クラウス演じる謎めいたカリガリ博士と、博士が操る夢遊病者チェザーレ(コンラート・ファイト)が引き起こす連続殺人事件の顛末が語られる。青年の回想は狂気におちいった博士が精神病院に収容されたところで終わるのだが、その直後に博士が現れ、上記の回想はすべて青年の妄想で、青年こそが精神病院の入院患者であることが明らかにされる。狂気と正気、患者と医師が入れ替わる衝撃的な展開と表現主義の美術セットは当時の日本にも大きな衝撃を与えた。

丸山はこの作品を1926年頃に新宿武蔵野館において徳川夢声(1894～1971年)の活弁で観ており、映画の内容とともに『『カリガリ博士』などは、夢声の説明と離れてはぼくのなかにはないんだね』『表現派の手法もすごく新しかったけれど、夢声の説明がまたそれとピッタリ合って実際、斬新だった』(埴谷雄高との対談「文学と学問」)と夢声の活弁を高く評価している。



映画『カリガリ博士』(アイ・ヴィー・シー提供)

発売元: アイ・ヴィー・シー  
価格 ¥1,800+税

「展示物一覧」へ戻る [↩](#)

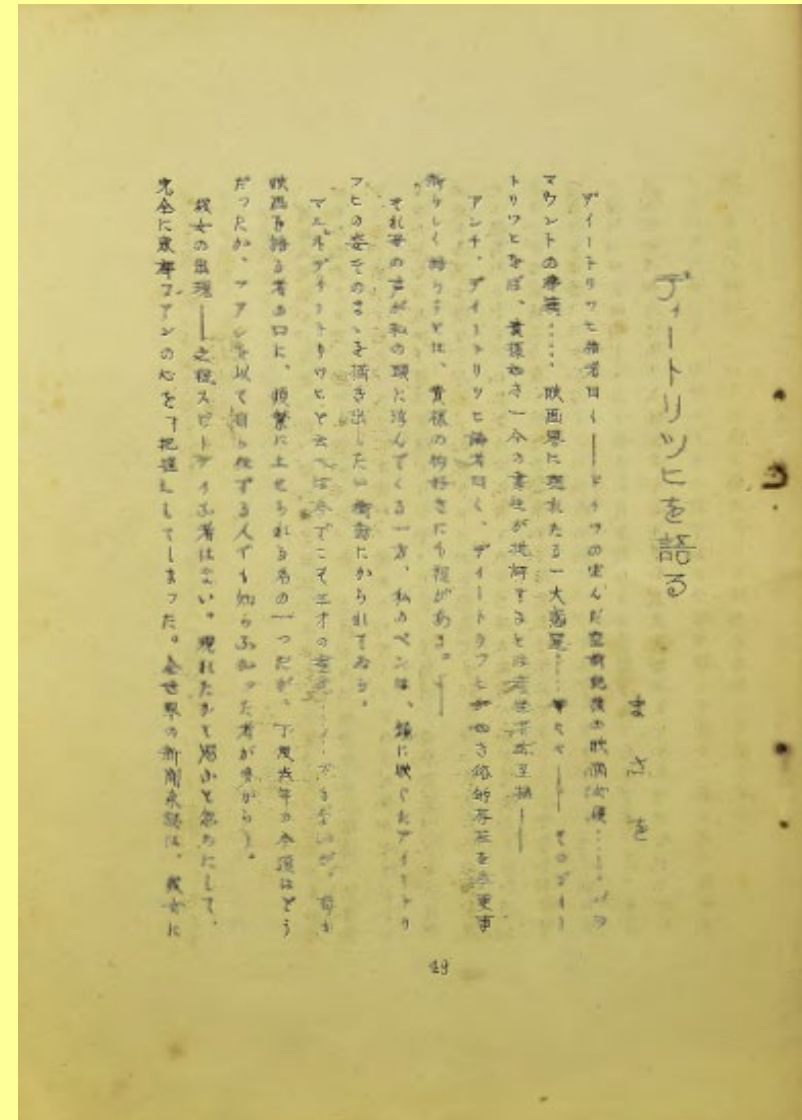
## 「ディートリツヒを語る」『四平会会誌』創刊号、1931年、丸山眞男文庫蔵

『四平会会誌』は府立第一中学校1929年度の四年丙組同級生によって編まれた同人雑誌。創刊号の刊行は1931年9月と思われる。

丸山は、同誌に寄稿した「ディートリツヒを語る」という記事について、後に「私の評論(?)の処女作だった」(「映画とわたくし」と回想している。

この文章で丸山は、ドイツ出身のハリウッド女優マレーネ・ディートリヒの魅力は、彼女を見出したジョセフ・フォン・スタンバーグ監督の「意中を殆んど残すところなく読み取って、その意を驚く程、完全に彼女の動作にあらはした」ところにあるという。しかしこの指摘はディートリヒをスタンバーグの単なる「傀儡」に過ぎないと片づけてしまうことを意味しない。スタンバーグはディートリヒを起用することによって、はじめて自分の思い通りの表現が可能になる、ということでもあるというのだ。

丸山のこの「評論」はどことなくヘーゲル『精神現象学』のいわゆる「奴隷の弁証法」の議論を思い起こさせる、といったら穿ちすぎであろうか。ヘーゲルは、第一論文「近世儒教における徂徠学の特質並びにその国学との関連」をはじめとして、丸山の学問のなかで重要な位置を占めるのだが、当時17歳の丸山青年はすでにその著作に親しんでいたのだろうか。あるいはもともと近しい考え方を有していたのだろうか。



## 丸山眞男(筆名・まさを)「ディートリツヒを語る」(全集未収録)

ディートリツヒ信者曰く——ドイツの生んだ空前絶後の映画女優……パラマウントの弗箱……映画界に現れたる一大惑星……等々々——そのディートリツヒをば、貴様如き一介の書生如きが批評するとは奇怪僭越至極——

アンチ・ディートリツヒ論者曰く、ディートリツヒが如き俗的存在を今更新らしく語らうとは、貴様の物好きにも程がある。——

それ等の声が私の頭に浮んでくる一方、私のペンは、鏡に映じたディートリツヒの姿そのまゝを描き出したい衝動にかられてゐる。

マルレネディートリツヒと云へば今でこそ三才の童児……でもないが、苟も映画を語る者の口に、頻繁に上せられる名の一つだが、丁度去年の今頃はどうかったか、ファンを以て自ら任ずる人でも知らなかった者が多からう。

彼女の出現——之程スピーデイな者はない。現れたかと思ふと忽ちにして、完全に東都ファンの心を「把握」してしまった。全世界の新聞雑誌は、彼女に対する最大級の讃辞を惜まなかった。そして一般ファンからは盲目的と見えるまでの熱烈な支持を受けた。

何が彼女をさうさせたか。

彼女はベルリン子だった。即ちヨーロツパの女であつた。決してアメリカの女でもアメリカ風の女でもなかった。従つて彼女の美的表現は、所謂、聖林(ホリウッド)型とは全く異つてゐた。さうして、実に彼女の「型」こそ一般大衆の待望してゐた型に外ならなかった。実際これまで、ファンは聖林の女優が皆、あまりに共通せる分子を備えてゐる。——即ち一つの型が形成されてゐる事をもどかしく思つて居た。そしてグretaガルボに漸くその不満の発散の道を見出してゐた。しかし、ガルボはあの通り巨弾を散発するに止まってゐる……正にかくの如き状勢にある時、スタンバークは独逸に於てゲオルグ・カイザーの『二本のラバツツ』に出演してゐる彼女に目を附けるの慧眼を持ったのであつた。その頃スタンバークはウファ社のエミルニヤニングス最初のトーキー『ブルー、エンヂェル』に於ける、ヤニングスの相手役を血眼で探して居た。忽ち彼と彼女の間に契約が結ばれ、ロラの役を勤めたことは諸君の知つて居る通り。

結果は勿論、彼の予想以上だった。そこで彼は彼女を聖林へ連れ来り、彼女を文字通りの主演としての映画を作らうとして試みたのが『モロツコ』である。そして日本に於てはこの映画の方がブルー、エンヂェルよりも相当早く上映されたが為に、日本の一般大衆は突如として、マルレネディートリツヒの全貌に接し得た。——この特種事情が日本に於けるディートリツヒの価値を絶対的たらしめたものと考へられるのである。

一方、又私は思ふ。ディートリツヒは或程度迄、スタンバークあつて後の存在ではなからうかと、この意味からして、私は彼女が今までの所謂『名優』であるかを深く疑ふものである。

モロツコを見る時、間諜X27号を見る時、彼女の一つ一つの動作には、あまりにもまざまざとスタンバークその人の個性がにじみ出てゐるではないか。勿論、映画に於て、主演者自身の個性は、監督のそれによつて幾分犯されゐないものはない。しかし、スタンバーク、ディートリツヒのコンビネーションに於ては、その事実のあまりにも露骨な表現を私は感受する。

それは何を意味するか？ 私をして云はしむれば、彼女自身のすべてを、スタンバークその人の心に投入したのだ。彼女はスタンバークの意中を殆んど残すところなく読み取つて、その意を驚く程、完全に彼女の動作にあらはしたのである。もし傀儡(かいらい)と云ふ字が、例へば文楽座の人形より間接的に、自意識的の意を含めて用ひられ得るなれば、彼女はスタンバークの傀儡と云つて差支へない。

が一方、スタンバークから云へば如何、自分の気持を無気味な程に了解してくれる彼女——その彼女を用ひる事によつて彼は勿論、自己の奥の手を最大限度に活用する事が出来る。即ち二人の間の関係は形はあくまで傀儡だが、実質は全く相対関係にあるのである。

故に、『たとへ個性に立脚した創作的表現は出来ずとも監督の意を百パーセントに自己の動作に表はし得るならば、それも又映画に於ける名優である』と云ふ事が言い得るとせば、ディートリツヒをば現代映画界に於ける一大明星たる故失はないであらうと思ふ。

——完—— (一九三一、九、三〇)

(明らかな誤植は訂正し、旧字体は新字体に改めた)

「展示物一覧」へ戻る ( 🔍 )



## 丸山青年を魅了したマレーネ・ディートリヒ

丸山がファンだったドイツ出身のアメリカの映画女優、マレーネ・ディートリヒ（1904～92年）。映画監督ジョセフ・フォン・スタンバーグに才能を見出され、1930年の『嘆きの天使』で主役の歌手ローラ・ローラを演じ注目を集めた。以後この作品で確立した、性的魅力で年上の男性を誘惑し破滅させるファム・ファタールの役柄を数多くの映画で演じ、退廃的で妖しげな美貌と脚線美で世界中の人々を魅了した。1939年にナチスを忌避し、アメリカに帰化。戦後も『情婦』（ビリー・ワイルダー監督、1957年）、『黒い罌』（オーソン・ウェルズ監督、1958年）などの傑作に出演した。丸山は他にも、ジャネット・ゲイナーや水戸光子、左幸子といった女優が好きだったと語っている。

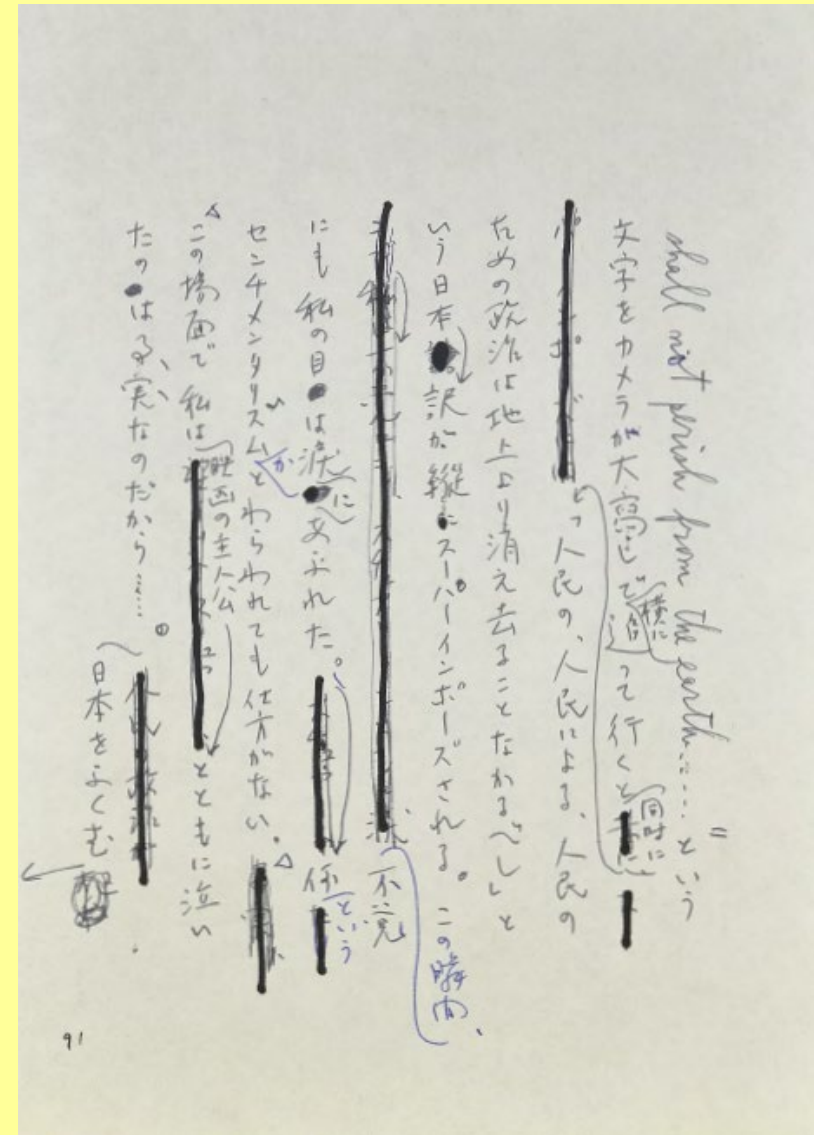


「展示物一覧」へ戻る (  )

## 「映画とわたくし」原稿(別稿・自作年表含む)、1979年、丸山眞男文庫蔵

『' 60』10号(1979年)に掲載された、丸山の青春時代である1920年代から1940年代前半にかけての映画にまつわる思い出をまとめた随筆。その中で丸山が特に強い感銘を受けた映画として挙げているのが、東京帝国大学法学部助教授であった1941年に観た『スミス都へ行く』である。

新人議員スミスが、リンカーン記念堂を訪れ、その壁面に刻まれたデティスバーグ演説の一節“Government of the people, by the people, for the people shall not perish from the earth……”に深く感動する場面に、「人民の、人民による、人民のための政治は地上より消え去ることなかるべし」という日本語訳がスーパー・インポーズされた。その瞬間、「不覚にも私の目は涙にあふれた」という。「日本をふくむ枢軸ファシズムの世界的な高まりのなかで、「……地上より消え去ることなかるべし」というあのフレーズは、さながら満目荒涼とした原野をふきすさぶ嵐に揺らぎながら立っている一本の樹のように映った」ためである。『スミス都へ行く』を観たおよそ1週間後か10日後に真珠湾攻撃が起こり、この作品は丸山が太平洋戦争前に観た最後のアメリカ映画となった。

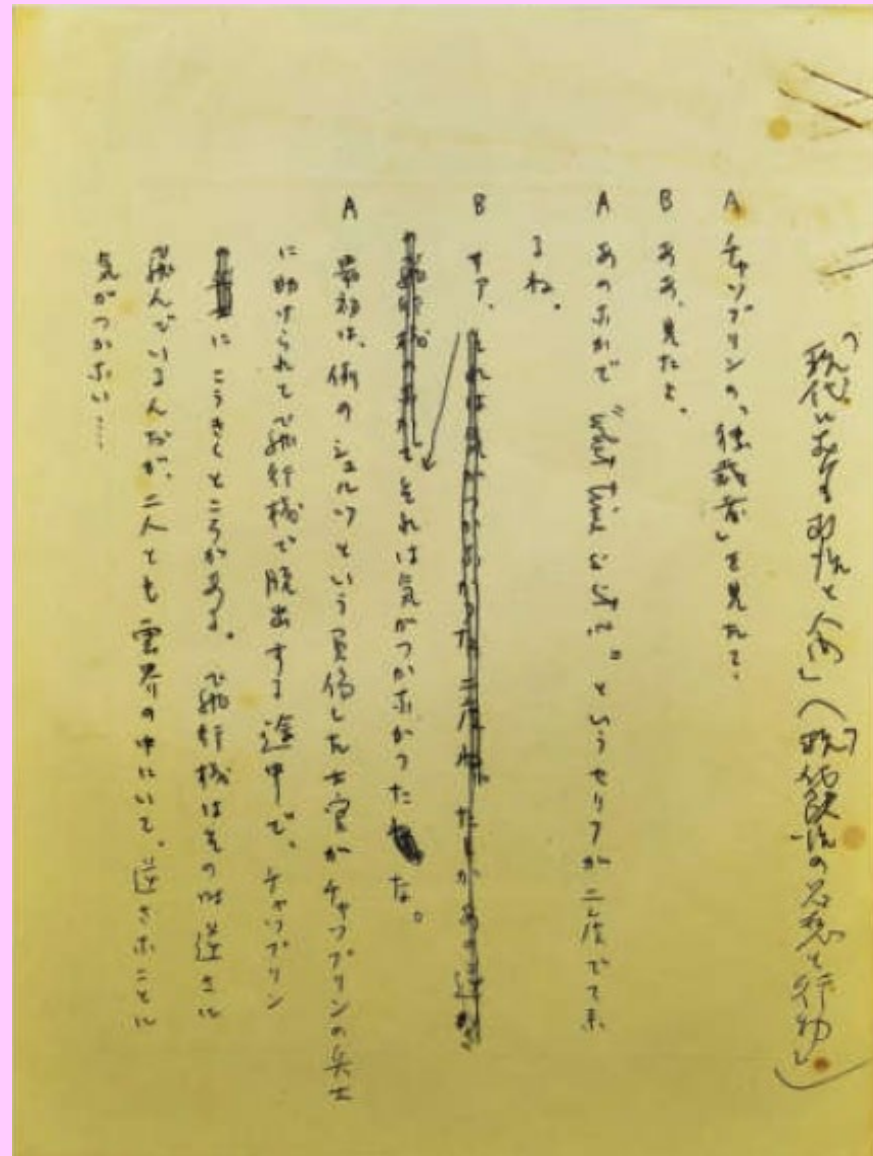


## テーマ3:映画の中の「現代」と「人間」——丸山、加藤の映画評論



## 「現代における人間と政治」草稿断片」、1961年9月、丸山眞男文庫蔵

『人間と政治』(有斐閣、1961年)に発表されたこの論文は、チャップリンの映画を事例に「現代」に生きる人間の危機を論じる。丸山は、『独裁者』冒頭のチャップリン演じる床屋と士官が、乗っている飛行機が逆さまであるにもかかわらず、それに気付かないシーンを、人間と社会の関係が倒錯した「逆さの世界」の住人にとっては、逆さまの世界が逆さとして意識されない」ことの暗示だと読み解く。その典型が正気と狂気が転倒したナチス治下のドイツの住人たちであった。体制の「内側」に住む彼らは、異論・異端といったその「外側」にあるイメージと不通であったために、「内側」のイメージのみを累積させ、遂に自らの住む世界が逆さまであることに気付かなかった。このような傾向は、テクノロジーやマスコミュニケーションの発達によって、価値の画一化が進む「現代」においてより深刻化しており、それに対して丸山は「内」と「外」の境界に立ちその間を往還する、「他者をあくまで他者としながら、しかも他者をその他在において理解する」「知性」の機能の重要性を説く。



「展示物一覧」へ戻る (↩)

## ※丸山が観た映画

チャップリンの独裁者『The Great Dictator』、チャールズ・チャップリン監督、1940年（日本公開1960年）、アメリカ

チャールズ・チャップリン(1889～1977年)が製作、脚本、監督、主演した。ナチス・ドイツに対する警戒がまだ強くないとき、チャップリンは早くもヒトラーの危険を認識し、ヒトラーとナチズム、あるいは独裁者を揶揄する映画をつくったのである。チャップリンはヒトラーと誕生日が4日違いで、顔立ちも似ることを利用し、映画ではユダヤ人街に暮らす床屋のチャーリーと総統ヒンケル(＝ヒトラー)のよく似たふたりの役を演じる。ヒンケルとナパロニ(＝ムッソリーニ)の演説は言葉がまったく通じずに、彼らの演説は無意味だと訴えるなど、独裁者を揶揄する場面が多い。床屋のチャーリーはひょんなことから総統ヒンケルと入れ替わり、総統として党大会で演説する羽目に陥る。「自由」と書かれた壇上に、仕方なしにおずおずと登ったチャーリーは「6分間の演説」と呼ばれる名演説を行う。この演説は役柄を越えてチャップリン自身が、名もなき人々に向けて民主主義への希望と連帯を訴えたものだった。この演説場面のためにチャップリンは初の完全トーキー映画として製作した。またリーフェンシュタールによるナチスの宣伝映画『意志の勝利』(1935年)に対するパロディ映画でもあった。



『チャップリンの独裁者』の一場面

「展示物一覧」へ戻る (🔍)

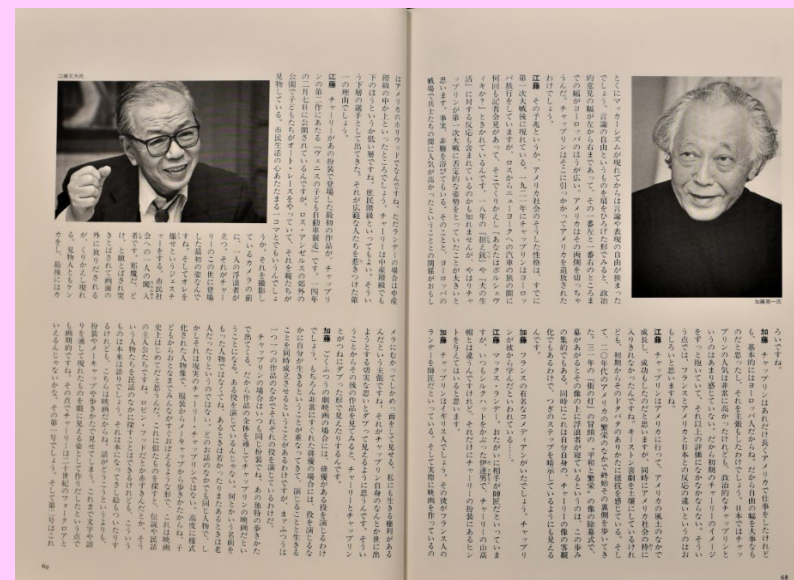
# 江藤文夫と加藤

戦後、加藤や丸山が映画を論ずるに当って、示唆を与えたのが評論家の江藤文夫(1928～2005年)である。丸山に『チャップリンの独裁者』を観るようすすめたのも江藤だった(江藤の証言に拠る)。江藤は、東京大学経済学部を卒業後、1956年から『映画芸術』の編集部員となり、あえて映画の専門家ではない、様々な分野の知識人に映画にまつわる文章を執筆させる斬新な企画で同誌をリードした。その際に原稿依頼のため、編集者として加藤や丸山に接したことが、江藤が加藤、丸山と交流を持つきっかけとなった。後にフリーの評論家に転じ、1971年からは成蹊大学で教鞭を執った。映像論・コミュニケーション論を専門とし、特に映画の主題よりも、「映像」そのものを読み解くことに主眼を置く「映像評論」を展開し、映画評論の世界で異彩を放った。

加藤は、戦後日本と並走した多面的な江藤の仕事には、動かない「中心」があったと指摘する。その中心とは「戦後文化・戦後社会のありかた」に対する問題関心であり、「それを自分の眼で見ようとする強い意志」だったとして、それが「私を惹き付ける」(「夕陽妄語『江藤文夫の仕事』について」)と述べている。



江藤文夫(左)と加藤(右)、1993年、平凡社提供



江藤文夫・加藤周一「対談 笑いの創造——チャーリー・チャップリン」『チャップリンの笑い 寅さんの笑い——笑いの民話学』(童心社、1993年)より

「展示物一覧」へ戻る (🔍)



加藤周一(筆名・石)「真面目な冗談 淀長流解説「愛のコリーダ」」『毎日新聞』  
1977年9月21日付夕刊

加藤は、1970年代以降、「真面目な冗談」(『毎日新聞』)や「山中人間話」「夕陽妄語」(共に『朝日新聞』)といった時評コラムを連載したが、そこでも映画を主題としたものは多かった。加藤の映画評論の特徴は、映画の背後にある現代社会や日本文化のはらむ問題が透視され、それに批判的考察がなされるところにある。ここでは、阿部定事件を題材とする大島渚監督の『愛のコリーダ』(1976年)が、その直接的な性表現が問題となり、日本での公開に当たって大幅な修正が加えられた事件を、当時『日曜洋画劇場』(テレビ朝日)の解説で人気を博していた映画評論家、淀川長治(1909～98年)の口吻をまねて、アイロニカルに論じている。またパスティーシュの名手としての加藤の一面もうかがわせる。

よくボカしましたねえ、よくかくしましたねえ、いや、アノモノじゃなくて、フィルムを、それでもわかりましたね、ジューッとみればわかりました、人間のからだの解剖学的構造が一定なんですねえ、ボカしてもわかりました、そこへ兵隊が行進してきましたねえ、制服で鉄砲をかついで、狭い道を進んできました、町の人がならんで日の丸を振ってました、するとあの着流しの男が兵隊の列とは逆の方向に、ひとりだけすれちがって歩いてきましたね、一九三六年にひとりだけ日本軍国主義とは反対の方向に歩いてきました、大島渚というすばらしい監督が、やっぱり抵抗の映画を作りましたねえ、軍隊は公的権力の方へ、男は私的快楽の方へ、向かってゆきました、国家権力がとめどもなく私的領域へ侵入してきた時代に、私的なものを公的なものに対立させた男が、立派ですねえ、英雄ですねえ、感激しましたねえ、相手方の女もえらくみえてきましたねえ、それから女がいいました、「首を締めてやろうか、殺してやろうか」、それで男が「やってくれ」といいました、政治社会学的な話が心理学的な水準に移ってきましたねえ、感覚的な快楽の極限が死に近づきました、精神分析学者が好きそうですねえ、「死のエロス化」ですねえ、大島監督は、そっちの方をくわしく撮りました、わかりすぎる位よくわかりましたねえ、この映画の題名がフランスでは「官能の領域」ですね、シャンゼリゼーの映画館でロングランを続けてます、日本の紳士がタークサン、タークサン見にきてますねえ、みんな黒い背広を着て、ネクタイを締めて、航空会社のショルダー・バッグをさげて、誰だか区別がつかないほど似ていました、みんなマジメな顔をして、東京でみられない写真をパリでみてるんですねえ、それでもパリで見られるものを東京でみられなくする自分の国の政府に、文句一ついわない不思議な、不思議な紳士たちですねえ、そういう紳士がパリの映画館にもう、いっぱい、世界に比類がない、日本の紳士と富士山、やはり今パリで上映中のルイス・ブニュエル監督の作品「欲望のこの不明瞭な対象」で、この巨匠がちゃあんと「ストリップ」を見る日本紳士を撮っているんですねえ、もし大島監督がパリの映画館の光景を撮ったら、傑作ですねえ、痛烈ですねえ、胸にぐーっとこたえますねえ、「愛のコリーダ」の次には「愛のコリーダをパリでみる日本の紳士、その社会心理学」という映画ができますねえ、その映画のできる日まで、それでは皆さん、サイナラ、サイナラ、サイナラ。



「展示物一覧」へ戻る (  )

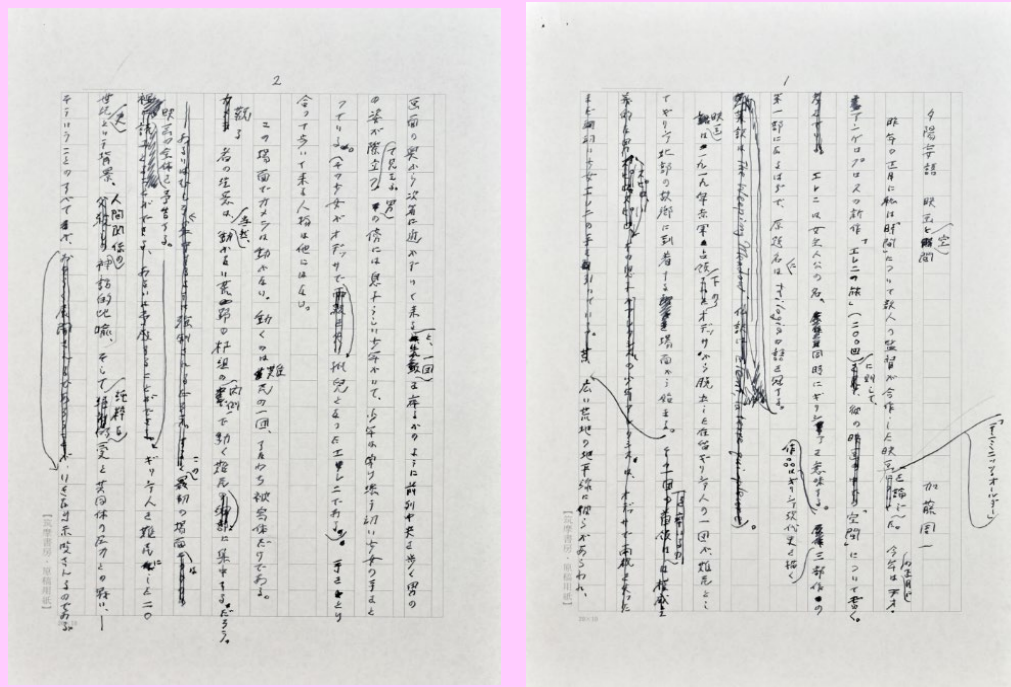


# 「夕陽妄語 映画と空間」

加藤は、現代を代表するギリシャの映画監督、テオ・アングロプロス(1935～2012年)の作品を高く評価していた。「映画と空間」でも、エレニという一人の女性を通して、ギリシャの現代史を描いた『エレニの旅』について論じている。加藤は、アングロプロス作品に「旅」という主題を見出す。『エレニの旅』がオデッサからギリシャへの難民のシーンから始まるように、エレニをはじめ映画の主人公たちは、国境を越えて「空間」を移動する。それは、人間が「旅」によって、この世界から、国境の向こう側にある、予測不可能な他界へと踏み出していくこと、挑戦することを意味している。まさに国境はこの世と他界、生と死の接点であり、アングロプロスはこの国境の「イメージ」を、一連の作品に特徴的な、立ち込めた霧の描写に象徴させている。また、それは霧に包まれたような不分明な世界に生きざるを得ない現代の人間の条件をも表わしているのだろう。この詩人＝映画監督は、「詩的には遂に見きわめることのできない霧のなかの世界に生き、かつ死ぬほかはない人間の条件を優しく、いたわるように、示すのである」。



新聞切抜き「夕陽妄語 映画と空間」『朝日新聞』2005年1月24日付、加藤周一文庫蔵



原稿「夕陽妄語 映画と空間」、2005年、加藤周一文庫蔵

「展示物一覧」へ戻る (🔍)

## ※加藤が観た映画

『エレニの旅』Τριλογία: Το Λιβάδι που Δακρύζει、テオ・アングロプロス監督、2004年(日本公開2005年)、ギリシャ・フランス・イタリア・ドイツ

1919年から1949年までの、ギリシャに生きる一人の女性、エレニ(エレニはギリシャを象徴する名前)の半生を通じて、歴史に翻弄される人間の悲劇を詩的に描く。ロシア革命によってオデッサを追われたギリシャ人の一団が、故国ギリシャに帰還するところからこの「旅」は始まる。その難民の中に、革命で両親を失い、スピロスの一家の養女となったエレニ(アレクサンドラ・アイディニ)がいた。やがて成長したエレニは、義父スピロスの息子アレクシス(ニコス・プルサニディス)と愛し合うようになり、密かに双子の男の子を出産する。しかし、二人の間に子どもがいることを知らないスピロスが、エレニと強引に結婚しようとしたため、エレニとアレクシスは村から逃亡する。エレニは、新天地でアコーディオン奏者となったアレクシスと新たな生活を始めるのだが、次第に独裁政権下の左翼弾圧、第二次大戦における枢軸国による占領、戦後の内戦といった激動のギリシャ現代史にのみ込まれていく。本作でアングロプロスは、登場人物たちの身近な日常の空間と、旅の空間とを異なるカメラワークによって描き分け、エレニにとっての、そして人間にとっての「旅」の意味を、美しく表現している。

◆ 完成披露特別試写会 ご招待状 ◆

テオ・アングロプロス監督作品

# エレニの旅

TRILOGY : THE WEeping MEADOW — TRILOGIA : TO LIVADHI POU DHAKRISI

「永遠と一日」以来6年ぶりのアングロプロス監督の新作「エレニの旅」が、05年春、シャンテシネで日本公開を迎えます。ロシア革命のオデッサから難民となって帰国する孤児エレニ、ファシズムの到来から第二次大戦と占領、内戦から戦後にいたる歴史を、エレニは音楽好きのアレクシスとの愛に生きていく。幼い日に、エレニとアレクシスは、河のはじまりを探しに行こうと約束していた…。

<ニュー・オデッサの村>、<白布の丘の村>と二つの大きな村を建造(一つは湖中に沈む)。CG技術を排してアナログに徹底し、映画ほんらいの力と美しさを1秒1秒にみながらせる、2時間50分の大作です。

どうぞ、この特別試写会にてご高覧ください。

●監督・脚本:テオ・アングロプロス ●脚本協力:トニー・グエッラ、ペトロス・マルカリス、ジョルジオ・シルヴァーニ ●撮影:アンドレアス・シナノス ●音楽:エレニ・カラインドルー [サントラユニバーサル クラシックス] ●製作:フィービー・エコノモプロス ●出演:アレクサンドラ・アイディニ、ニコス・プルサニディス ほか ●2004年 希・仏・伊・独合作、ギリシャ映画 ●日本語字幕:池澤夏樹 ●共同提供:フランス映画社、紀伊國屋書店 ●配給:フランス映画社、<パウ・シリ>ズ作品 ●2004年ベルリン映画祭正式出品、2004年ヨーロッパ映画賞受賞

■ 日時: 12月21日(火) PM1:00 開映 (開場12:30、上映時間:2時間50分)

■ 場所: **スペースFS汐留(新橋)** 港区東新橋1-1-16 汐留FSビル

JR「新橋」汐留口徒歩3分/東京メトロ銀座線「新橋」2番出口3分/都営浅草線「新橋」A4出口1分/都営大江戸線「汐留」4分/ゆりかもめ「新橋」1分/(旧 徳間ホール)

●記名ご本人以外の方、および開映後のご入場は、固くお断り致します。

配給: **フランス映画社**  TEL 03-3545-3411 FAX 03-3545-3519

書簡『『エレニの旅』試写会案内』、2005年、加藤周一文庫蔵

「展示物一覧」へ戻る (  )



丸山眞男、加藤周一映画年表

丸山眞男、加藤周一がともに鑑賞した映画作品のタイトルは、赤字で示しています。

|             | 丸山眞男（1914～96年）                                                                                                                                                                    | 加藤周一（1919～2008年）                                                                                                                                                                                                                                                   |
|-------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1914（大正3）年  | 3月22日、大阪府東成郡天王寺村において、丸山幹治・セイの次男として生まれる。                                                                                                                                           |                                                                                                                                                                                                                                                                    |
| 1919（大正8）年  |                                                                                                                                                                                   | 9月19日、東京府東京市本郷区本富士町一番地において、加藤信一・織子の長男として生まれる。                                                                                                                                                                                                                      |
| 1920（大正9）年  | 4月、兵庫県武庫郡精道村立精道尋常小学校に入学。                                                                                                                                                          |                                                                                                                                                                                                                                                                    |
| 1921（大正10）年 | 春、東京市四谷区立四谷第一尋常小学校に転校。<br>この頃、父に連れられて、初めて映画（活動写真）を浅草で観る。                                                                                                                          |                                                                                                                                                                                                                                                                    |
| 1923（大正12）年 | 小学校時代に、四谷館などで『オーバー・ゼ・ヒル』（H・ミラード監督）や連続大活劇ものなどを観て映画ファンとなる。<br>関東大震災に遭い、長谷川如是閑宅で一時避難生活を送る。                                                                                           |                                                                                                                                                                                                                                                                    |
| 1925（大正14）年 | この頃、『荒木又右衛門』（池田富保監督）などチャンバラ映画を盛んに観る。                                                                                                                                              |                                                                                                                                                                                                                                                                    |
| 1926（昭和元）年  | 3月、東京府立第一中学校入学試験に合格。合格祝いに新宿武蔵野館で『ポー・ジェスト』（H・ブレノン監督、弁士徳川夢声）を観る。<br>4月、東京府立第一中学校に入学。この頃、新宿武蔵野館で『カリガリ博士』（R・ヴィーネ監督）を観る。<br>小学校時代に続いて映画に熱中し、女優ジャネット・ゲイナーのファンになる。午後の授業をエスケープして芝園館などに行く。 | 4月、東京府豊多摩郡渋谷町立常磐松尋常小学校に入学。                                                                                                                                                                                                                                         |
| 1927（昭和2）年  | 『ビッグ・パレード』（K・ヴィダー監督）、『第七天国』（F・ボーゼージ監督）。                                                                                                                                           |                                                                                                                                                                                                                                                                    |
| 1928（昭和3）年  | 『新版大岡政談』（伊藤大輔監督）、『つばさ』（W・A・ウェルマン監督）。                                                                                                                                              |                                                                                                                                                                                                                                                                    |
| 1929（昭和4）年  |                                                                                                                                                                                   | この頃、母方の祖父・増田熊六に連れられて、従兄弟たちとよく映画を観に行く。熊六はとりわけ「西洋もの」を好んだ。                                                                                                                                                                                                            |
| 1930（昭和5）年  | 『西部戦線異状なし』（L・マイルストン監督）など外国トーキー映画や傾向映画『何が彼女をそうさせたか』（鈴木重吉監督）、『アジアの嵐』（V・ブドフキン監督）、『アスファルト』（J・マイ監督、弁士徳川夢声）などを観る。                                                                       |                                                                                                                                                                                                                                                                    |
| 1931（昭和6）年  | 4月、第一高等学校文科乙類に入学。<br>中学時代のクラス同人雑誌『四平会会誌』に「ディートリツヒを語る」を発表。<br>『モロッコ』（J・V・スタンバーグ監督）、『地獄の天使』（H・ヒューズ監督）、『大地』（A・ドヴジェンコ監督）、『西部戦線一九一八年』（G・W・パブスト監督）、『三文オペラ』（G・W・パブスト監督）、『仇討選手』（内田吐夢監督）。  | 4月、東京府立第一中学校に入学。<br>『三文オペラ』（G・W・パブスト監督）。                                                                                                                                                                                                                           |
| 1932（昭和7）年  | 『自由を我等に』（R・クレール監督）、『人生案内』（N・エック監督）。                                                                                                                                               |                                                                                                                                                                                                                                                                    |
| 1933（昭和8）年  | 4月、唯物論研究会の講演会に参加し、本富士署に検挙・拘留される。<br>11月、ナチスの宣伝映画『ヒットラー青年』（H・シュタインホフ監督）を観る。<br>『巴里祭』（R・クレール監督）、『制服の処女』（L・ザーガン監督）、『夢みる唇』（P・ツィンナー監督）、『雨』（L・マイルストン監督）。                                | 『巴里祭』（R・クレール監督）。                                                                                                                                                                                                                                                   |
| 1934（昭和9）年  | 4月、東京帝国大学法学部政治学科に入学。<br>『会議は踊る』（E・シャレル監督）。                                                                                                                                        | 『会議は踊る』（E・シャレル監督）、『商船テナシチー』（J・デュヴィヴィエ監督）、『隣の八重ちゃん』（島津保次郎監督）。                                                                                                                                                                                                       |
| 1935（昭和10）年 | 『外人部隊』（J・フェデー監督）。                                                                                                                                                                 | 『未完成交響楽』（W・フォルスト監督）、『モンパルナスの夜』（J・デュヴィヴィエ監督）、『外人部隊』（J・フェデー監督）。                                                                                                                                                                                                      |
| 1936（昭和10）年 |                                                                                                                                                                                   | 4月、第一高等学校理科乙類に入学。庭球部と映画演劇研究会に所属。当時公開された映画のほとんどを妹の本村久子氏と連れ立って観に行っていた。特にJ・デュヴィヴィエをはじめとする東和商事輸入のヨーロッパ映画を熱心に観ていた。『ゴルゴダの丘』（J・デュヴィヴィエ監督）、『地の果てを行く』（J・デュヴィヴィエ監督）、『我等の仲間』（J・デュヴィヴィエ監督）、『オペラハット』（F・キャブラ監督）、『ミモザ館』（J・フェデー監督）。<br>12月、第一高等学校『向陵時報』に「映画評「ゴルゴダの丘」」を藤澤正という筆名で発表。 |
| 1937（昭和12）年 | 4月、東京帝国大学法学部助手となり、南原繁の指導を受ける。                                                                                                                                                     | 『新しき土』（A・ファンク、伊丹万作監督）、『どん底』（J・ルノワール監督）。<br>この頃から、ノート（「青春ノート」）をとりはじめる（～42年）。                                                                                                                                                                                        |
| 1938（昭和13）年 | 『アトの丘の丘』（田坂具隆監督）、『破産の王』（田坂具隆監督）。                                                                                                                                                  | 『鎧なき騎士』（J・フェデー監督）、『冬の宿』（豊田四郎監督）、『泣虫小僧』（豊田四郎監督）、『にんじん』（ハ・ブ・ゴッダール監督）、『無味金の王様』（ハ・ブ・ゴッダール監督）、『銀十郎忠臣』（山本嘉次郎監督）、『松島                                                                                                                                                      |

|               |                                                                                                                                                                                                                                         |                                                                                                                |
|---------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 昭和13) 年       | 『五人の斥候兵』(田坂具隆監督)、『路傍の石』(田坂具隆監督)。                                                                                                                                                                                                        | (J・デュヴィヴィエ監督)、『舞踏会の手帖』(J・デュヴィヴィエ監督)、『綴方教室』(山本嘉次郎監督)、『牧場物語』(木村荘十二監督)、『路傍の石』(田坂具隆監督)。                            |
| 1939 (昭和14) 年 | 『暖流』(吉村公三郎監督)。                                                                                                                                                                                                                          | 『望郷』(J・デュヴィヴィエ監督)、『素晴しき休日』(J・キューカー監督)、『ブルグ劇場』(W・フォルスト監督)、『土と兵隊』(田坂具隆監督)。                                       |
| 1940 (昭和15) 年 | 6月、東京帝国大学法学部助教授となる。<br>『民族の祭典』(L・リーフェンシュタール監督)、『美の祭典』(L・リーフェンシュタール監督)。                                                                                                                                                                  | 4月、東京帝国大学医学部に入学。<br>『家庭教師』(大庭秀雄監督)。                                                                            |
| 1941 (昭和16) 年 | 11月、『スミス都へ行く』(F・キャブラ監督)を観る(戦時中に見た最後のアメリカ映画)。                                                                                                                                                                                            | 12月、『舞踏会の手帖』(J・デュヴィヴィエ監督)をもう一度観る。                                                                              |
| 1942 (昭和17) 年 | 10月、講義(東洋政治思想史)を開始する。<br>『ハワイ・マレー沖海戦』(山本嘉次郎監督)。                                                                                                                                                                                         | 秋、中村眞一郎、福永武彦、窪田啓作らと文学集団「マチネ・ポエティク」を結成。                                                                         |
| 1943 (昭和18) 年 | 『世界に告ぐ』(H・シュタインホフ監督)。                                                                                                                                                                                                                   | 9月、繰り上げ卒業により、東京帝国大学附属医院医局(佐々内科)の副手となる。                                                                         |
| 1944 (昭和19) 年 | 7月、応召し平壤に向かうが、10月に病気のため招集解除。                                                                                                                                                                                                            |                                                                                                                |
| 1945 (昭和20) 年 | 3月、臨時召集により広島市宇品の陸軍船舶司令部に応召。<br>『姿三四郎』(黒澤明監督)、『宮本武蔵』(溝口健二監督)。<br>8月、宇品で被爆し敗戦を迎える。復員して青年文化会議、庶民大学三島教室に参加。                                                                                                                                 | 春、東京帝国大学医学部佐々内科教室と共に信州上田の結核療養所に疎開。<br>8月、上田で敗戦を迎える。<br>10月、「原子爆弾影響日米合同調査団」の一員として約2か月間広島に滞在し、調査に従事。             |
| 1946 (昭和21) 年 | 2月、思想の科学研究会、二〇世紀研究所に参加。5月、「超国家主義の論理と心理」を発表。                                                                                                                                                                                             | 「天皇制を論ず」、「天皇制について」、「新しき星董派に就いて」を発表。                                                                            |
| 1948 (昭和23) 年 |                                                                                                                                                                                                                                         | 『悲恋』(J・ドラノワ監督)、『女』(木下恵介監督)、『面影』(五所平之助監督)、『美女と野獣』(J・コクトー監督)、『海の牙』(R・クレマン監督)。                                    |
| 1949 (昭和24) 年 |                                                                                                                                                                                                                                         | 『大いなる幻影』(J・ルノワール監督)。                                                                                           |
| 1950 (昭和25) 年 | 6月、東京大学法学部教授となる。平和問題談話会が全面講和・非武装中立・東西両陣営の平和共存を主張する際に中心的な役割を果たす。                                                                                                                                                                         | 『賭はなされた』(J・ドラノワ監督)、『無防備都市』(R・ロッセリーニ監督)、『自転車泥棒』(V・デ・シーカ監督)、『羅生門』(黒澤明監督)。                                        |
| 1951 (昭和26) 年 |                                                                                                                                                                                                                                         | 11月、医学研究のため、フランス政府半給費留学生として渡仏。<br>『四重奏』(R・スマート監督)、『オルフェ』(J・コクトー監督)。                                            |
| 1952 (昭和27) 年 | 『サンセット大通り』(B・ワイルダー監督)、『ファウスト(悪魔編)』(G・ガローネ監督)、『天井桟敷の人々』(M・カルネ監督)、『ヨーロッパの何処かで』(G・V・ラドヴァニ監督)、『欲望という名の電車』(E・カザン監督)。                                                                                                                         | 『禁じられた遊び』(R・クレマン監督)、『ライムライト』(G・チャップリン監督)、『Avec André Gid』(M・アレグレ監督)。                                           |
| 1953 (昭和28) 年 |                                                                                                                                                                                                                                         | 『ボルジア家の毒薬』(C＝ジャック監督)、『情炎の女サロメ』(W・ディターレ監督)。                                                                     |
| 1954 (昭和29) 年 |                                                                                                                                                                                                                                         | 『洪水の前』(A・カイヤット監督)、『恐怖の報酬』(H＝G・クルーゾー監督)。                                                                        |
| 1955 (昭和30) 年 | 『鉄路の闘い』(R・クレマン監督)、『裏窓』(A・ヒッチコック監督)、『アウシュウィツの女囚』(W・ヤクボフスカ監督)、『ドン・カミロ頑張る』(J・デュヴィヴィエ監督)、『パンと恋と夢』(L・コメンチーニ監督)、『もず』(J・ファーラー監督)、『フレンチ・カンカン』(J・ルノワール監督)、『大いなる希望』(D・コレッティ監督)、『スタア誕生』(G・キューカー監督)、『生きものの記録』(黒澤明監督)。                               | 3月、フランスより帰国し、東京大学医学部附属病院に復帰。<br>6月、「日本文化の雑種性」を発表。<br>『ファンタジア』(B・シャープスティーン監督)。                                  |
| 1956 (昭和31) 年 | 『夏の嵐』(L・ヴィスコンティ監督)、『われら巴里ッ子』(M・カルネ監督)、『愛情は深い海のごとく』(A・リトヴァク監督)、『ロメオとジュリエット物語』(L・アルンシュタム監督)、『マーティ』(D・マン監督)、『旅情』(D・リーン監督)、『河の女』(M・ソルダーティ監督)、『スミス都へ行く』(F・キャブラ監督)、『現金に手を出すな』(J・ベッケル監督)、『空中ぶらんこ』(G・リード監督)、『居酒屋』(R・クレマン監督)、『天井桟敷の人々』(M・カルネ監督)。 | 『赤い風船』(A・モラリス監督)。                                                                                              |
| 1957 (昭和32) 年 | 『過去をもつ愛情』(H・ヴェルヌイユ監督)。                                                                                                                                                                                                                  | 『抵抗(レジスタンス)―死刑囚の手記より―』(R・ブレッソン監督)、『宿命』(J・ダッシン監督)、『マダムと泥棒』(A・マッケンドリック監督)、『戦場にかける橋』(D・リーン監督)、『王子と踊子』(L・オリヴィエ監督)。 |
|               | 『眼には眼を』(A・カイヤット監督)、『楳島マノン』(H＝G・クルーゾー監督)、『登山節考』(木下重                                                                                                                                                                                      |                                                                                                                |

|             |                                                                                                                                                                                                                                   |                                                                                                                                                                    |
|-------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1958（昭和33）年 | 『 <b>眼には眼を</b> 』（A・カイヤット監督）、『 <b>情痴・ラン</b> 』（H・メルラン監督）、『 <b>情山郎</b> 』（ホ・ト心介監督）、『 <b>鶴は翔んでゆく</b> 』（M・カラトーゾフ監督）、『 <b>静かなるドン（黎明編・憂愁編）</b> 』（S・ゲラーシモフ監督）、『 <b>モダン・タイムス</b> 』（C・チャップリン監督）。<br>3月、加藤周一との対談「『眼には眼を』に見るアラブ対西欧」を『映画評論』に発表。 | 『 <b>眼には眼を</b> 』（A・カイヤット監督）、『 <b>法隆寺</b> 』（羽仁進監督）。<br>3月、丸山眞男との対談「『眼には眼を』に見るアラブ対西欧」を『映画評論』に発表。                                                                     |
| 1960（昭和35）年 | 日米安保条約改定反対運動に参加。『 <b>ニュールンベルグの戦犯　13階段への道</b> 』（F・V・ポドマニツキー監督）、『 <b>チャップリンの独裁者</b> 』（C・チャップリン監督）。                                                                                                                                  | 10月、カナダのブリティッシュ・コロンビア大学に准教授として赴任。日本文化史を講じる（～69年）。                                                                                                                  |
| 1961（昭和36）年 | 10月、米国で在外研究（～62年）。『 <b>夜と霧</b> 』（A・レネ監督）。                                                                                                                                                                                         |                                                                                                                                                                    |
| 1963（昭和38）年 |                                                                                                                                                                                                                                   | 『Les Abysses（深淵）』（N・パパタキス監督）、『Mourir à Madrid（マドリッドに死す）』（F・ロシフ監督）、『Joli Mai（美しき五月）』（C・マルケル監督）。                                                                     |
| 1967（昭和42）年 |                                                                                                                                                                                                                                   | 『 <b>中国女</b> 』（J=L・ゴダール監督）。                                                                                                                                        |
| 1968（昭和43）年 |                                                                                                                                                                                                                                   | 8月に『羊の歌』、9月に『続羊の歌』を刊行。11月、「言葉と戦車」を発表。<br>『 <b>ワン・プラス・ワン</b> 』（J=L・ゴダール監督）。                                                                                         |
| 1969（昭和44）年 | 東大紛争の影響で講義を中止。                                                                                                                                                                                                                    | 『 <b>ブリティッシュ・サウンズ</b> 』（J=L・ゴダール監督）。                                                                                                                               |
| 1971（昭和46）年 | 3月、東京大学法学部教授を停年を待たずに辞職する。<br>『 <b>おかしな夫婦</b> 』（A・ヒラー監督）、『 <b>罪と罰</b> 』（L・クリジャーノフ監督）。                                                                                                                                              | 『 <b>ありふれたファシズム　野獣たちのバラード</b> 』（M・ロンム監督）、『 <b>紅色娘子軍</b> 』、『 <b>日本侠客伝　刃（ドス）</b> 』（小沢茂弘監督）。                                                                          |
| 1972（昭和47）年 | 『 <b>帰郷</b> 』（A・アロフ他監督）、『 <b>ラムの大通り</b> 』（R・アンリコ監督）。                                                                                                                                                                              | 『 <b>関東緋桜一家</b> 』（マキノ雅弘監督）。                                                                                                                                        |
| 1973（昭和48）年 |                                                                                                                                                                                                                                   | この頃、女性史研究家、映画研究家の矢島翠と結婚。                                                                                                                                           |
| 1975（昭和50）年 | 英国・米国で在外研究（～76年）。                                                                                                                                                                                                                 | 2月、『日本文学史序説　上』を刊行。                                                                                                                                                 |
| 1976（昭和51）年 |                                                                                                                                                                                                                                   | 『 <b>愛のコリーダ</b> 』（大島渚監督）。                                                                                                                                          |
| 1977（昭和52）年 |                                                                                                                                                                                                                                   | 『 <b>密告の砦</b> 』（M・ヤンチョー監督）、『 <b>欲望のあいまいな対象</b> 』（L・ブニュエル監督）。                                                                                                       |
| 1978（昭和53）年 |                                                                                                                                                                                                                                   | 『 <b>遠い雷鳴</b> 』（S・レイ監督）、TV映画『 <b>ホロコースト　戦争と家族</b> 』（M. J. チョムスキー監督）。                                                                                               |
| 1979（昭和54）年 |                                                                                                                                                                                                                                   | 『 <b>旅芸人の記録</b> 』（T・アンゲロプロス監督）。                                                                                                                                    |
| 1980（昭和55）年 |                                                                                                                                                                                                                                   | 4月、『日本文学史序説　下』を刊行。<br>『 <b>影武者</b> 』（黒澤明監督）、『 <b>大理石の男</b> 』（A・ワイダ監督）。                                                                                             |
| 1981（昭和56）年 |                                                                                                                                                                                                                                   | 『 <b>オブローモフの生涯より</b> 』（N・ミハルコフ監督）                                                                                                                                  |
| 1983（昭和58）年 |                                                                                                                                                                                                                                   | 『 <b>サン★ロレンツォの夜</b> 』（P・タヴィアーニ監督）、『 <b>ことの次第</b> 』（W・ヴェンダース監督）、『Le Japon Insolite（おどろくべき日本）』（F・ライヒェンバッハ監督）、『 <b>そして船は行く</b> 』（F・フェリーニ監督）、『 <b>遠い一本の道</b> 』（左幸子監督）。 |
| 1984（昭和59）年 |                                                                                                                                                                                                                                   | 7月、「夕陽妄語」の連載を『朝日新聞』で始める（～2008年）。                                                                                                                                   |
| 1985（昭和60）年 |                                                                                                                                                                                                                                   | 『 <b>SHOAH　ショア</b> 』（C・ランズマン監督）。                                                                                                                                   |
| 1986（昭和61）年 |                                                                                                                                                                                                                                   | 『 <b>シテール島への船出</b> 』（T・アンゲロプロス監督）、『 <b>パパは、出張中！</b> 』（E・クストリッツァ監督）。                                                                                                |
| 1987（昭和62）年 | 『 <b>ローザ・ルクセンブルク</b> 』（M・V・トロッタ監督）。                                                                                                                                                                                               | 『 <b>ローザ・ルクセンブルク</b> 』（M・V・トロッタ監督）。                                                                                                                                |
| 1988（昭和63）年 |                                                                                                                                                                                                                                   | 4月、立命館大学国際関係学部客員教授に就任（～2000年）。<br>『 <b>火垂るの墓</b> 』（高畑勲監督）。                                                                                                         |
| 1989（平成元）年  |                                                                                                                                                                                                                                   | 『 <b>利休</b> 』（勅使河原宏監督）、『 <b>千利休　本覺坊遺文</b> 』（熊井啓監督）。                                                                                                                |
| 1990（平成2）年  |                                                                                                                                                                                                                                   | 『 <b>悲情城市</b> 』（侯孝賢監督）。                                                                                                                                            |
| 1991（平成3）年  |                                                                                                                                                                                                                                   | 『 <b>安重根と伊藤博文</b> 』（オム・キルソン監督）。                                                                                                                                    |
| 1992（平成4）年  |                                                                                                                                                                                                                                   | 4月、立命館大学国際平和ミュージアム館長に就任（～95年）。                                                                                                                                     |
| 1993（平成5）年  |                                                                                                                                                                                                                                   | 『 <b>Pétain（ペタン）</b> 』（J・マルブフ監督）。                                                                                                                                  |
| 1994（平成6）年  |                                                                                                                                                                                                                                   | 『 <b>さらば、わが愛　覇王別姫</b> 』（陳凱歌監督）、　『 <b>戯夢人生</b> 』（侯孝賢監督）、『 <b>青い嵐</b> 』（田壮壮監督）、『 <b>鷲の指輪</b> 』（A・ワイダ監督）。                                                             |
| 1995（平成7）年  |                                                                                                                                                                                                                                   | 『 <b>SHOAH　ショア</b> 』（C・ランズマン監督）、『 <b>エイジアン・ブルー　浮島丸サコン</b> 』（堀川弘通監督）。                                                                                               |
| 1996（平成8）年  | 8月15日、進行性肝臓癌のため82歳で死去。                                                                                                                                                                                                            | 『 <b>ピフォア・ザ・レイン</b> 』（M・マンチェフスキー監督）、『 <b>ユリシーズの瞳</b> 』（T・アンゲロプロス監督）、『 <b>アン</b>                                                                                    |



|             |  |                                                                |
|-------------|--|----------------------------------------------------------------|
|             |  | ダーグラウンド』（E・クストリッツァ監督）。                                         |
| 1998（平成10）年 |  | 『パーフェクトサークル』（A・ケノヴィッチ監督）、『南京1937』（呉子牛監督）、『永遠と一日』（T・アンゲロプロス監督）。 |
| 1999（平成11）年 |  | 『笑う男』（P・レニ監督）。                                                 |
| 2001（平成13）年 |  | 『ウンベルト・D』（V・デ・シーカ監督）。                                          |
| 2003（平成15）年 |  | 『オランダの光』（P=R・d・クローン監督）。                                        |
| 2004（平成16）年 |  | 6月、「九条の会」の呼びかけ人に加わる。<br>『10ミニッツ・オールダー』（B・ベルトリッチ他監督）。           |
| 2005（平成17）年 |  | 『エレニの旅』（T・アンゲロプロス監督）。                                          |
| 2008（平成20）年 |  | 12月5日、多臓器不全のため89歳で死去。                                          |

- ・随筆、座談、回想、日記などから、丸山と加藤が確実に観たと思われる映画を記載した。
- ・映画は、基本的に丸山と加藤が観た年に記載し、それが不明なものは日本公開年に記載した。
- ・赤色で表記されている映画は、両者が共通して観ているもの。

加藤周一映画関連著作

| 収録     | 初出                      | タイトル                                  | 取り上げられている主な映画                                       |
|--------|-------------------------|---------------------------------------|-----------------------------------------------------|
|        | 『向陵時報』1936年12月16日付      | 「映画評「ゴルゴダの丘」                          | 『ゴルゴダの丘』ジュリアン・デュヴィヴィエ監督、1935年、フランス                  |
| 自1     | 『向陵時報』1937年2月18日付       | 「映画評『新しき土』」                           | 『新しき土』アーノルド・ファンク、伊丹万作監督、1937年、日本・ドイツ                |
|        | 『向陵時報』1938年2月1日付        | 「(映画評) 鎧なき騎士」                         | 『鎧なき騎士』ジャック・フェード監督、1937年、英国                         |
|        | 『向陵時報』1938年10月18日付      | 「映画『冬の宿』について」                         | 『冬の宿』豊田四郎監督、1938年、日本                                |
|        | 『東京大学新聞』1948年2月12日付     | 「〔映画評〕悲恋」                             | 『悲恋』ジャン・ドラノワ監督、1943年、フランス                           |
|        | 『展望』1949年3月号            | 「世界の窓 戦後のフランス映画」                      | 『美女と野獣』ジャン・コクトー監督、1946年、フランス                        |
|        |                         |                                       | 『海の牙』ルネ・クレマン監督、1946年、フランス                           |
|        | 『文学界』1950年3月号           | 「サルトルと映画「賭はなされた」を繞つて」                 | 『賭はなされた』ジャン・ドラノワ監督、1947年、フランス                       |
|        | 『文藝』1950年10月号           | 「河出通信 ボヴァリー夫人——映画と小説」                 | 『ボヴァリー夫人』ヴィンセント・ミネリ監督、1949年、アメリカ                    |
| 著11    | 『展望』1951年1月号            | 「映画の問題——『無防備都市』について」                  | 『無防備都市』ロベルト・ロッセリーニ監督、1945年、イタリア                     |
|        | 『夕刊西日本新聞』1951年3月15日付    | 「ウの目タカの目 映画博物館」                       |                                                     |
|        | 『三田新聞』1951年4月20日付       | 「映画批評の在り方」                            |                                                     |
|        | 『夕刊西日本新聞』1951年6月7日付     | 「ウの目タカの目 懐しの日本映画」                     |                                                     |
|        | 『西日本新聞』1952年3月19日付      | 「フランス映画の一面——経営難から美術作品の製作へ」            |                                                     |
|        | 『西日本新聞』1952年4月15日付      | 「映画に現われたジイド——文学的生涯の再構成」               | 『Avec André Gid』マルク・アレグレ監督、1952年、フランス               |
|        | 『東京タイムズ』1953年6月7日付      | 「映画にも冷戦」                              | 『恐怖の報酬』アンリ＝ジョルジュ・クルーゾー 監督、1953年、フランス・イタリア           |
|        | 『西日本新聞』1953年7月18日付      | 「五所平之助氏の意見——エキゾチズムで映画を売りたいくはない」       |                                                     |
|        | 『西日本新聞』1953年11月28日付     | 「似て非なる二つの映画——サロメとリュクレース・ボルジア」         | 『ボルジア家の毒薬』クリスチャン＝ジャック監督、1952年、フランス・イタリア             |
|        |                         |                                       | 『情炎の女サロメ』ウィリアム・ディターレ監督、1953年、アメリカ                   |
|        | 『西日本新聞』1954年5月1日付夕刊     | 「もめる映画“洪水以前”」                         | 『洪水の前』アンドレ・カイヤット監督、1954年、フランス                       |
|        | 『日本経済新聞』1957年5月18日付     | 「映画の古典主義」                             | 『抵抗—ある死刑囚の手記より—』ロベール・ブレッソン監督、1956年、フランス             |
| 著11、自1 | 『映画芸術』1957年7月号          | 「映画における古典主義の成立」                       | 『オルフェ』ジャン・コクトー監督、1950年、フランス                         |
|        |                         |                                       | 『無防備都市』ロベルト・ロッセリーニ監督、1945年、イタリア                     |
|        |                         |                                       | 『抵抗—ある死刑囚の手記より—』ロベール・ブレッソン監督、1956年、フランス             |
|        |                         |                                       | 『オルフェ』ジャン・コクトー監督、フランス、1950年                         |
|        |                         |                                       | 『禁じられた遊び』ルネ・クレマン監督、1952年、フランス                       |
| 著11    | 『映画評論』1957年11月号         | 「「宿命」とよばれた映画」                         | 『宿命』ジュールス・ダッシン監督、1957年、フランス                         |
|        | 『映画評論』1957年7月号          | 「座談会 映画について——ブレッソンから狸御殿まで」(岩崎昶・原田義人他) |                                                     |
|        | 『映画評論』1958年1月号          | 「《座談会》新しい戦争の寓話——「戦場にかける橋」」(松山善三・菊村到)  | 『戦場にかける橋』デヴィッド・リーン監督、1957年、英国・アメリカ                  |
| 対2、座2  | 『映画評論』1958年3月号          | 「〔対談〕『眼には眼を』に見るアラブ対西欧」(丸山眞男)          | 『眼には眼を』アンドレ・カイヤット監督、1957年、フランス・イタリア                 |
|        | 『芸術新潮』1958年6月号          | 「記録映画の効用——映画「法隆寺」をめぐる」                | 『法隆寺』羽仁進監督、1958年、日本                                 |
| 著10    | 『毎日グラフ』1963年8月4・11・18日号 | 「パリの芝居・パリの映画」                         | 『Les Abysses (深淵)』ニコス・パパタキス監督、1963年、フランス            |
|        |                         |                                       | 『Mourir à Madrid (マドリッドに死す)』フレデリック・ロシフ監督、1963年、フランス |
|        |                         |                                       | 『Joli Mai (美しき五月)』クリス・マルケル監督、1963年、フランス             |
| 著11    | 『展望』1972年2月号            | 「紅色娘子軍、ゴダールおよび仏像」                     | 『紅色娘子軍』1970年、中国                                     |
|        |                         |                                       | 『中国女』ジャン＝リュック・ゴダール監督、1967年、フランス                     |
| 著7     | 『毎日新聞』1972年3月7～8日付      | 「さらば藤純子」                              | 『関東緋桜一家』マキノ雅弘監督、1972年、日本                            |
| 自6     | 『毎日新聞』1977年2月23日付夕刊     | 「真面目な冗談 道化にとって座頭市とは何か」                | 『座頭市』シリーズ                                           |
| 自6     | 『毎日新聞』1977年9月21日付夕刊     | 「真面目な冗談 淀長流解説『愛のコリーダ』」                | 『愛のコリーダ』大島渚監督、1976年、日本・フランス                         |
| 自6     | 『朝日ジャーナル』1979年4月6日号     | 「山中人閒話——〈ホロコースト〉について」                 | 『ホロコースト 戦争と家族』マーヴィン・J・チョムスキー監督、1978年、アメリカ(TV映画)     |
| 著21、自6 | 『朝日新聞』1980年11月10日付夕刊    | 「山中人閒話 二つの映画」                         | 『大理石の男』アンジェイ・ワイダ監督、1977年、ポーランド                      |
|        |                         |                                       | 『影武者』黒澤明監督、1980年、日本                                 |

|           |                             |                                |                                                 |
|-----------|-----------------------------|--------------------------------|-------------------------------------------------|
| 自6        | 『友 Iwanami Hall』139、1981年1月 | 「映画・東京・「岩波ホール」」                |                                                 |
| 著21       | 『朝日新聞』1982年10月18日付夕刊        | 「山人人間話 映画一つ・小説一つ」              | 『オブローモフの生涯より』ニキータ・ミハルコフ監督、1981年、ソ連              |
|           | 『朝日ジャーナル』1983年3月18日号        | 「外交官モラエスの変身——映画『恋の浮島』を見て」      | 『恋の浮島』パウロ・ローシャ監督、1983年、日本                       |
| 著21、タ1    | 『朝日新聞』1986年2月21日付夕刊         | 「夕陽妄語 二つの映画——バルカン半島から」         | 『パパは、出張中！』エミール・クストリッツア監督、1985年、ユーゴスラヴィア         |
|           |                             |                                | 『シテール島への船出』テオ・アングロプロス監督、1983年、ギリシャ・イタリア         |
| 著21、タ1    | 『朝日新聞』1987年9月17日付夕刊         | 「夕陽妄語 「自発性」ということ」              | 『ローザ・ルクセンブルク』マルガレーテ・フォン・トロッタ監督、1985年、西ドイツ       |
| 著22、タ1    | 『朝日新聞』1988年12月19日付夕刊        | 「夕陽妄語 一九八八年の思い出三つ」             | 『火垂るの墓』高畑勲監督、1988年、日本                           |
| 著22、自8、タ1 | 『朝日新聞』1989年10月16日付夕刊        | 「夕陽妄語 利休・二つの映画」                | 『利休』勅使河原宏監督、1989年、日本                            |
|           |                             |                                | 『千利休 本覺坊遺文』熊井啓監督、1989年、日本                       |
| 著22、タ1    | 『朝日新聞』1991年7月18日付夕刊         | 「夕陽妄語 歴史の見なおし」                 | 『安重根と伊藤博文』オム・キルソン監督、1979年、北朝鮮                   |
| 著22、      | 『朝日新聞』1993年5月31日付夕刊         | 「夕陽妄語 映画『ペタン』の事」               | 『Pétain (ペタン)』ジャン・マルブフ監督、1993年、フランス             |
|           | 『チャップリンの笑い 寅さんの笑い』童心社、1993年 | 「対談 笑いの創造——チャーリー・チャップリン」(江藤文夫) | チャールズ・チャップリンの作品                                 |
| 著22、タ2    | 『朝日新聞』1994年1月20日付夕刊         | 「夕陽妄語 中国映画三題」                  | 『さらば、わが愛 霸王別姫』陳凱歌監督、1993年、香港                    |
|           |                             |                                | 『戯夢人生』侯孝賢監督、1993年、台湾                            |
|           |                             |                                | 『青い嵐』田壮壮監督、1993年、中国                             |
| 自9、タ2     | 『朝日新聞』1995年1月23日付夕刊         | 「夕陽妄語 『鷺の指輪』」                  | 『鷺の指輪』アンジェイ・ワイダ監督、1992年、ポーランド・英国・フランス・ドイツ       |
| タ2        | 『朝日新聞』1995年3月22日付夕刊         | 「夕陽妄語 アウシュヴィッツ解放五十周年」          | 『SHOAH ショア』クロード・ランズマン監督、1985年、フランス              |
| タ2        | 『朝日新聞』1995年9月20日付夕刊         | 「夕陽妄語 『エイジアン・ブルー』の事」           | 『エイジアン・ブルー 浮島丸サコン』堀川弘通監督、1995年、日本               |
| タ2        | 『朝日新聞』1996年3月19日付夕刊         | 「夕陽妄語 三つの映画——バルカンから」           | 『ビフォア・ザ・レイン』ミルチョ・マンチェフスキー監督、1994年、英国・フランス・マケドニア |
|           |                             |                                | 『ユリシーズの瞳』テオ・アングロプロス監督、1995年、フランス・イタリア・ギリシャ      |
|           |                             |                                | 『アンダーグラウンド』エミール・クストリッツア監督、1995年、フランス・ドイツ・ハンガリー  |
| 自9、タ2     | 『朝日新聞』1998年4月22日付夕刊         | 「夕陽妄語 サライェヴォと南京」               | 『パーフェクトサークル』アデミル・ケノヴィッチ監督、1997年、ボスニア・フランス       |
|           |                             |                                | 『南京1937』呉子牛監督、1998年、日本・中国・香港・台湾                 |
| 自9、タ2     | 『朝日新聞』1998年12月16日付夕刊        | 「夕陽妄語 濃い霧の中から」                 | 『南京1937』呉子牛監督、1998年、日本・中国・香港・台湾                 |
| タ2        | 『朝日新聞』1999年5月20日付夕刊         | 「夕陽妄語 「笑う男」再生」                 | 『笑う男』パウル・レニ監督、1928年、アメリカ                        |
| タ2        | 『朝日新聞』2000年8月25日付夕刊         | 「夕陽妄語 名優たちの想出」                 | 『マダムと泥棒』アレクサンダー・マッケンドリック監督、1955年、英国             |
|           |                             |                                | 『戦場にかける橋』デヴィッド・リーン監督、1957年、アメリカ                 |
| タ3        | 『朝日新聞』2002年1月23日付夕刊         | 「夕陽妄語 日常性と非日常性」                | 『ウンベルト・D』ヴィットリオ・デ・シーカ監督、1952年、イタリア              |
| タ3        | 『朝日新聞』2003年9月18日付夕刊         | 「夕陽妄語 「オランダの光」」                | 『オランダの光』ピーター＝リム・デ・クローン監督、2003年、オランダ             |
| タ3        | 『朝日新聞』2004年1月22日付夕刊         | 「夕陽妄語 映画・時間について」               | 『10ミニッツ・オールダー』ベルナルド・ベルトルッチ他監督、2002年、英国・ドイツ・中国他  |
| 自10、タ3    | 『朝日新聞』2005年1月24日付夕刊         | 「夕陽妄語 映画と空間」                   | 『エレ二の旅』テオ・アングロプロス監督、2004年、フランス・ギリシャ・イタリア        |

丸山眞男映画関連著作

| 収録    | 初出                 | タイトル                                  | 取り上げられている主な映画・演劇                           |
|-------|--------------------|---------------------------------------|--------------------------------------------|
| 集6    | 『中央公論』1956年7月号     | 「記録映画「夜と霧」について」                       | 『夜と霧』アラン・レネ監督、1955年、フランス                   |
| 座2    | 『中央公論』1957年5月号     | 「〔座談〕映画・思想・政治」(岡本博、武田泰淳)              |                                            |
| 座2、対2 | 『映画評論』1958年3月号     | 「〔対談〕『眼には眼を』に見るアラブ対西欧」(加藤周一)          | 『眼には眼を』アンドレ・カイヤット監督、1957年、フランス・イタリア        |
| 座3    | 『映画評論』1958年12月号    | 「〔対談〕映画の思想性と大衆性」(福田定良)                |                                            |
| 座3    | 『民話』1959年1月号       | 「〔対談〕現代の政治的状況と芸術」(埴谷雄高)               |                                            |
| 座3    | 『映画評論』1959年5月号     | 「〔座談〕映画・女性・現代——現代芸術に映画は何をもたらすか」(左幸子他) |                                            |
| 集9    | 『人間と政治』有斐閣、1961年   | 「現代における人間と政治」                         | 『チャップリンの独裁者』チャールズ・チャップリン監督、1940年、アメリカ      |
| 座8    | 『ユリイカ』1978年3月号     | 「〔対談〕文学と学問」(埴谷雄高)                     | 『カリガリ博士』ロベルト・ウイーネ監督、1919年、ドイツ              |
| 集11   | 『’60』10号、1979年4月2日 | 「映画とわたくし」                             |                                            |
| 別集3   | 1980年インタビュー        | 「『加藤周一著作集』をめぐって——W氏との対談」              | 『暖流』吉村公三郎監督、1939年、日本                       |
| 座9    | 『図書』1988年4月号       | 「映画『ローザ・ルクセンブルク』をめぐって」                | 『ローザ・ルクセンブルク』マルガレーテ・フォン・トゥロッタ監督、1985年、西ドイツ |



自:『加藤周一自選集』岩波書店、著:『加藤周一著作集』平凡社、対:『加藤周一対話集』かもがわ出版、夕:『夕陽妄語』ちくま文庫  
集:『丸山眞男集』岩波書店、座:『丸山眞男座談』岩波書店、別集:『丸山眞男集 別集』岩波書店

# 参考文献

本展で使用した参考文献は以下の通りとなります。各タイトルのリンクをクリックいただくと、本大学での所蔵状況をご覧ください。

## <加藤周一の著作>

[『加藤周一著作集10 羊の歌』平凡社、1979年](#)

[『加藤周一対話集 第4巻 ことばと芸術』かもがわ出版、2000年](#)

[『過客問答——加藤周一対話集 別巻』かもがわ出版、2001年](#)

[『私にとっての20世紀——付 最後のメッセージ』岩波現代文庫、2009年](#)

[『夕陽妄語』1～3、ちくま文庫、2016年](#)

[鷲巣力・半田侑子編『加藤周一青春ノート 1937-1942』人文書院、2019年](#)

## <丸山眞男の著作>

[『現代における人間と政治』『丸山眞男集 第九巻』岩波書店、1996年](#)

[『映画とわたくし』『丸山眞男集 第十一巻』岩波書店、1996年](#)

[『丸山眞男集 別巻 新訂増補』岩波書店、2015年](#)

[丸山眞男・埴谷雄高「文学と学問」『丸山眞男座談 第四冊』岩波書店、1998年](#)

[『加藤周一著作集をめぐる』——W氏との対談』東京女子大学丸山眞男文庫編『丸山眞男集 別集 第三巻』岩波書店、2015年](#)

## <その他の著作>

[松沢弘陽・植手通有・平石直昭編『定本 丸山眞男回顧談\(上\)』岩波現代文庫、2016年](#)

[田中純一郎『日本映画発達史Ⅱ——無声からトーキーへ』中央公論社、1957年](#)

[津村秀夫『世界映画の作家と作風』勁草書房、1969年](#)

[北河賢三「一九三〇年代の学生生活——風俗と読書を中心に」『史観』114冊、1986年](#)

[都築勉『戦後日本の知識人——丸山眞男とその時代』世織書房、1995年](#)

[四方田犬彦『日本映画史100年』集英社新書、2000年](#)

[松沢弘陽「丸山眞男における文・現代批評と伝説の問題」八坂恒雄・平石直昭編『定本丸山眞男集』平凡社、2009年](#)

[江藤文夫、「江藤文夫の仕事」編集委員会編『江藤文夫の仕事2』影書房、2006年](#)

[荻部直『丸山眞男』岩波新書、2006年](#)

[佐藤忠男『増補版 日本映画史1』岩波書店、2006年](#)

[小林隆之・山本眞吾『映画監督ジュリアン・デュヴィヴィエ』国書刊行会、2010年](#)

[鷲巣力『加藤周一を読む——「理」の人にして「情」の人』岩波書店、2011年](#)

[鷲巣力『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか——『羊の歌』を読みなおす』岩波書店、2018年](#)

「展示物一覧」へ戻る (  )

＜主 催＞

立命館大学加藤周一現代思想研究センター  
東京女子大学丸山眞男記念比較思想研究センター

＜共 催＞

立命館大学平井嘉一郎記念図書館

＜協 力＞

丸山彰様(丸山眞男氏御長男)  
本村雄一郎様(加藤周一氏著作権継承者)  
岩波書店  
平凡社  
アイ・ヴィー・シー